

文部科学省委託研究
令和7年度幼児教育の学び強化事業

幼児教育における 「多文化を楽しむ心」を 育むための 特色ある取組の収集

令和8年3月

一般社団法人 保育教諭養成課程研究会

はじめに

今日、国際社会との関わりが急速に深まる中で、次代を担う子供たちには、多様な背景をもつ人々と共生し、グローバルな社会で活躍できる資質・能力を育むことが求められています。とりわけ幼児教育の現場においては、外国人の子供の入園などを機に、日本語とは異なる言語や歌などの文化に触れる機会が自然な形で生まれており、多文化共生の精神を学ぶ重要性がかつてないほど高まっています。

このような状況を受け、本研究会は文部科学省より「令和7年度幼児教育の学び強化事業」の委託を受け、幼児教育における「多文化を楽しむ心」を育むための調査研究を行ってまいりました。2018年に改訂された幼稚園教育要領等の領域「環境」においても、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しみ、異なる文化に触れる活動を通じて、国際理解の意識の芽生えを養うことが明記されています。本事業は、全国の幼稚園等で実践されている特色ある取組を収集・発信することで、幼児一人一人が「多文化を楽しむ心」を育める環境を一層推進することを目的としています。

報告書は、全国の国立大学附属幼稚園をはじめとした公私立園を対象とするアンケート調査、及び抽出された園へのインタビュー調査の結果をまとめたものです。具体的な事例として、外国人の子供の入園をきっかけとした文化への関心の広がりや、地域住民・卒園生・保護者による自国の紹介、さらにはALT(外国語指導助手)等の外部人材が園生活を共にしながら交流を深める取組など、19園の多様な事例を収録しました。各事例では、教育課程への位置付けや具体的な活動の様子、実施上の留意点、そして取組が子供たちに与えた効果についても写真等も交えて紹介しております。

本報告書を、全国の教育委員会や幼児教育センター、そして日々子供たちと向き合う現場の先生方に広くご活用いただけることを願っております。各幼稚園等におかれましては、これらの事例をそのまま踏襲するだけでなく、それぞれの園の地域性や子供たちの実態に応じた「特色ある取組」を展開するためのヒントとして役立てていただければ幸いです。こうした草の根の実践が積み重なることが、将来の多文化共生社会を支える大きな力になると確信しております。

結びに、本調査研究の趣旨に深く賛同し、多忙な教育・保育の現場においてアンケートやインタビュー、資料提供に多大なるご協力をいただきました各幼稚園等の関係者の皆様、ならびに専門的な見地から多面的なご助言をいただきました調査研究実行委員の先生方に、厚く御礼申し上げます。皆様の熱意あるお力添えにより、本報告書が完成に至りましたことをここに深く感謝いたします。

令和8年3月

一般社団法人 保育教諭養成課程研究会 理事長 無藤 隆

目 次

はじめに

第1章 本調査研究の概要

1. 本調査研究に至る背景	1
2. 本調査研究の目的と具体的な取組	1
(1) 本調査研究の目的	1
(2) 目的に向けての具体的な取組	1
3. 本調査研究の概要	2
(1) 実施体制	2
(2) 本調査研究の方法	2
(3) 研究成果の活用と普及	2

第2章 研究内容

1. 「多文化を楽しむ心」を育むことを目指して	3
(1) これからの学校教育に求められる多様な子供を包摂する教育課程の在り方	3
(2) 「多文化を楽しむ心」とは	4
2. 「多文化を楽しむ心」を育むための特色ある取組	5
(1) 取材園の概要	5
(2) 研究協力園の概要	5
3. 「多文化を楽しむ心」を育むための特色ある取組の報告	7
(1) 「多文化を楽しむ心」を育むための特色ある取組の報告	8
学校法人愛泉学園 吉田保育園(栃木県)	8
社会福祉法人桜福祉会 認定こども園こどものもり(埼玉県)	12
千代区立九段幼稚園(東京都)	15
港区立芝浦幼稚園(東京都)	17
港区立南山幼稚園(東京都)	21
荒川区立日暮里幼稚園(東京都)	23
学校法人安見学園 板橋富士見幼稚園(東京都)	25
江戸川区立船堀幼稚園(東京都)	29
国立大学法人金沢大学 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園(石川県)	33
静岡市立登呂こども園(静岡県)	35
名古屋市立第一幼稚園(愛知県)	37
学校法人光明学園 光明幼稚園(京都府)	39
大阪市立常盤幼稚園(大阪府)	41
学校法人成城学園 認定こども園日吉幼稚園(大阪府)	43
学校法人三笠学園 認定こども園岩国東幼稚園(山口県)	45

学校法人吉田学園 認定こども園岩国川下幼稚園(山口県)	47
学校法人四国大学 四国大学附属認定こども園(徳島県)	50
本山町立本山保育所(高知県).....	54
国立大学法人福岡教育大学 福岡教育大学附属幼稚園(福岡県)	56
(2) 取組から得られる示唆.....	59
研究協力園の取組から得られる示唆	59
① 言葉をはじめとする豊かな表現としての多文化との関わり	59
② 身近な人を通しての多文化との関わり	59
③ 我が国の伝統文化・身近な文化・異なる文化との出会い	59
④ 教職員間の共通理解に基づく組織的な取組	59
⑤ 園長の役割.....	60
取材園の取組から得られる示唆	60
a. 外国籍の幼児の入園を機に、他の国の言葉や文化への関心をもち広がる事例.....	60
b. 地域に住む外国籍の方や卒園生が園を訪問し、その国の言葉や文化を紹介する事例	60
c. 外国籍の講師が、定期的に園を訪問し、園生活を共にしながら交流する事例.....	61
d. 外国での生活経験をもつ保護者が、言葉や文化を伝える事例.....	61
e. 遊びに ALT が加わり、外国籍の幼児の遊びの援助や他の幼児に英語での問い掛けを行うことにより、多文化理解の感覚がもてるようにする事例.....	61
f. その他 特色ある事例	62
おわりに.....	63
奥付	65
参考資料：「多文化を楽しむ心」を育むにつながる実践 一覧表	

第1章 本調査研究の概要

1. 本調査研究に至る背景

2018年改訂の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領(以下、本報告書においては、「幼稚園教育要領等という」)では、身近な環境との関わりに関する領域「環境」において、以下の点が新たに示された。

身近な環境との関わりに関する領域「環境」

[内容]

(6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。

[内容の取扱い]

(4) 文化や伝統に親しむ際には、正月や節句などの我が国の伝統行事、国歌、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること。

こうした改訂を踏まえ、現在、多くの幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園(以下、本報告書においては、「幼稚園等」という)では、日常生活の中で子供たちが我が国や地域社会に根付く様々な文化や伝統に親しむ活動が行われている。これらの機会を通して、我が国の子供にとっては、自らの文化を理解し、アイデンティティを育む機会となり、外国にルーツをもつ子供にとっては、日本文化に触れ理解を深める機会となる。その上で、子供たちは、異文化に関する絵本の読み聞かせや、他国の音楽・遊びの体験、多様な背景をもつ人々との交流などを通して、互いの文化を尊重し合う意識が芽生えるなど、豊かな体験を重ねている。

2. 本調査研究の目的と具体的な取組

(1) 本調査研究の目的

今後ますますグローバル化が進む中で、幼児期から、他者を尊重し、多文化共生の精神を体験し学ぶことは極めて重要である。自国の文化と異なる文化や習慣を知ることによって育まれていく寛容さや共感力は、将来、多様な人々と協力する上で不可欠な社会的スキルとなるのではないか。

こうしたことを踏まえ、本調査研究では、「**幼児教育における「多文化を楽しむ心」を育むための特色ある取組の収集**」を目的として、研究を進めてきた。

(2) 目的に向けての具体的な取組

① 特色ある取組の収集と分析

幼稚園教育要領等に基づき、幼稚園等で実施されている「多文化を楽しむ心」を育むための特色ある取組や活動(絵本、音楽、遊び、交流等)を収集する。

収集した特色ある取組について、子供が経験し学んでいること、その取組(活動)の背景にあることやカリキュラム、園運営等(園長の役割も含む)の工夫の視点から分析する。

② 成果の発信と普及

収集した事例を「事例集」として整理・発信することにより、幼児教育の実践の場において子供一人一人の「多文化を楽しむ心」を育むための取組や実践について、全国的に広めていく。

3. 本調査研究の概要

(1) 実施体制

本事業は、一般社団法人保育教諭養成課程研究会が受託し、学識経験者、行政担当経験者、幼稚園等の園長からなる「調査研究実行委員会」を組織して遂行した。調査研究実行委員会の具体的な役割は以下のとおりである。

- ① 全国の国立大学附属幼稚園等や公私立園を対象としたアンケート調査の実施。
- ② アンケート調査より、特色ある取組を実施している園を抽出し、インタビュー調査を実施。
同時に、既に特色ある取組をしている園を研究協力園として、継続的な取組みについて、インタビュー調査を行う。
- ③ 特色ある取組（活動）についての実践記録をまとめた事例集の作成。

(2) 本調査研究の方法

① アンケート調査の実施

全国の国立大学附属幼稚園等や公私立園を対象に、アンケート調査を行い、特色ある取組（ALT などの外国人材の活用や外国人の保護者との連携等）の活用実態を把握した。

② インタビュー調査の実施

既に特色ある取組をしていると本研究会が把握していた 6 園を「研究協力園」とし、アンケート結果より幼児教育における「多文化を楽しむ心」を育むための特色ある取組をしている 13 園を加えた 19 園に対して、園長等の管理職と担当教諭等を対象に 10 月～12 月に詳細なインタビュー調査を実施した。

その際、カリキュラムへの位置付けや、園運営の工夫、活動の継続性の背景と子供の変容などに焦点を当てた。

③ 事例集の作成

調査結果を「幼児教育において『多文化を楽しむ心』を育むための事例集」として取りまとめた。

(3) 研究成果の活用と普及

本調査研究の成果は、ウェブ公開の方法で広く普及を図る予定である。研究会ホームページにて事例集を公開し、誰でも閲覧可能な体制を整える。また、学会等での発表や各種団体における研修にて成果を発表し、啓発活動に努める。

第2章 研究内容

本章では、幼児教育における「多文化を楽しむ心」を育むにつながる様々な実践を紹介している。研究に当たって確認したことは、なぜ、今、幼児教育において「多文化を楽しむ心を育む」ことが必要なのか、「多文化を楽しむ心」とは何かである。このことについて、学校教育全体で求められていることと、幼児教育段階で対応していくことの二つの視点から次のように考えた。

1. 「多文化を楽しむ心」を育むことを目指して

(1) これからの学校教育に求められる多様な子供を包摂する教育課程の在り方

近年、学校を取り巻く状況は著しく変化し、これからの学校教育の教育課程の在り方についての議論する中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程企画特別部会論点整理（令和7年9月25日）では、多様な子供たちの実態を示すとともに、こうした実態を包摂する柔軟な教育課程の在り方の検討の必要性を指摘している。具体的には、学級において、「家にある本の冊数が少なく学力の低い傾向が見られる子供」「特異な才能のある子供」「学習面又は行動面で著しい困難を示す子供」「日本語を家であまり話さない子供」「不登校傾向」「不登校」などの多様な子供の実態があることを前提とした教育課程の在り方である。ここでは、教育課程の在り方や、一人一人の特性を生かした柔軟な指導の在り方が求められている。

幼稚園等では、これまでも、入園する子供の家庭生活や保護者の子育ての考え方等による生活経験の差が一人一人異なることを前提として、一人一人の特性に応じる、あるいはその子供がもつ「よさ」を生かす、一人一人に応じる指導を重視してきた。ある意味では、「多様な子供たちの実態を包摂する教育課程」のもとで柔軟な指導を既に実践してきたと言える。しかし、それで十分と言うわけではない。特に、最近の傾向としては、日本語を母国語としない子供などの外国にルーツをもつ子供の入園は増加し、園では言葉の問題だけではなく、宗教上の配慮や、食事や生活習慣等の異文化への対応が求められるケースが増えているという実態がある。

この場合、先ず園運営の課題として挙げることは、外国人の保護者との連携、連絡はどのようにとるか、異なる文化をもつ子供がうまく園の文化に馴染めるだろうか等、日本語を母国語としない子供などの外国にルーツをもつ子供や保護者に焦点を当てた対応である。このことは、安心して安定した園生活を送るようになるためには不可欠なことであるが、同時に、受け入れる園の他の子供たち側への対応も考えていかねばならない。

前述した通り、子供たちが進学していく小・中学校においては、現在、多様な子供の実態を包摂する教育課程の在り方を検討している段階にある。ここでは、教育課程の運用だけに限らず、教育内容においても、多様な人々とともに、相互に信頼できる、秩序ある日本社会を形成する子供たちを育成していく視点をもつことが求められるだろう。幼児教育段階では、他者との出会いや関わりを通して関係を深め、問題を解決し、葛藤や対立を乗り越えて、よりよい人間関係をつくる資質・能力が一層求められることになる。

（２）「多文化を楽しむ心」とは

外国にルーツをもつ子供の増加に伴う多文化理解を進める上で大切なことは、我が国の子供にとっては、先ずは、我が国の文化を学び、日本人としてのアイデンティティを確立することであり、外国にルーツをもつ子供にとっては、我が国の文化を知る機会をつくっていくことである。

幼稚園等における日本語を母国語としない子供などの外国にルーツをもつ子供の入園の増加を踏まえ、現在、幼児教育において求められることは、他国の文化に触れることで、我が国の文化を意識し、そのよさを実感するとともに、子供たちが多様な文化を知ることを通して、より広い世界を知ることを楽しむことではないかと考えている。すなわち、子供たちは、自分とは異なる国や民族、宗教、習慣等をもつ子供たちとともに園生活を送る中で、多様な文化と出会い、自分が体験してきたことと異なる文化があることを知り、より広い世界を知っていくことになる。その際、知っていくことの喜びや楽しみを味わうとともに、自国の文化を一層意識するようになることが大切である。本調査研究では、このことを、「多文化を楽しむ心」を育むとした。

「多文化を楽しむ心」は、内面に育まれていくものであり、教えて身に付けていくというよりは、様々な体験を通して熟成していくものであると考えている。一般には、異なる言葉を知り、コミュニケーションなどの言葉によって異なる文化との出会いや関わりを深め、自国の文化との違いを知っていくことを「異文化理解」と言われている。ただし、幼児期の子供たちの異国の人々や文化への理解は、必ずしも言葉を通してではなく、また自国の文化との比較から深まるものでもない。極端な言い方かもしれないが、家庭での生活から一歩踏み出し、同年代の子供たちとともに生活する園生活は、幼児期の子供にとっては、既に「多文化との出会い」である。その過程で、子供たちは、外国にルーツをもつ人、日本語とは異なる言語を使う人と、共に生活し、関係を深めていく。同時に、相手が異なる文化をもつことを知っていく。幼児期の子供たちは、人間関係の広がりの中で、結果的に多文化を受け止めていると言える。

こうした幼児期の多文化との出会いは、今後一層進んでいく共生社会の中で求められる資質・能力を育むことにつながるのではないか。すなわち、園生活の中で人間関係を深めることを通して、様々な文化を知り、互いに尊重していくことを目指すことを「多文化理解」の基礎として、共生社会をたくましく生きるために必要な資質・能力と考えている。

これらのことを踏まえると、幼児教育段階の課題は、異なる文化との出会いをいかに楽しみ、子供たちの育ちにつながるような実りの多い時間としていくかである。その際、重要なことは、子供たちを取り巻く信頼する大人たちが多文化との出会いをどう受け止めるかである。その出会いを楽しみとして捉えるか、大変なこととして捉えるかによって、子供たちの受け止めは異なってくるだろう。そのことは、発達の時期によっても対応が異なる。このため、教育課程や指導計画などのカリキュラムはどうあったらよいかの検討が必要である。さらに、園内の体制をどう整えるかなどの園運営の在り方はもちろんのこと、視野を広くして地域にある人的・物的資源の有効な活用も求められるだろう。

本調査研究はこうした視点に立って、「多文化を楽しむ心」を育むにつながる好事例を収集し、「多文化との出会い」を「実り多い時間」とするための様々な工夫を分析した。

2. 「多文化を楽しむ心」を育むための特色ある取組

本調査研究では「多文化を楽しむ心」を育む実践に取り組んでいる幼稚園等について、アンケート調査から抽出し取材した園（以下、「取材園」という）13園及び研究協力園6園を含むの実践を取り上げている。研究開始時には、以下の a～e に示す取組を実践している園を想定していた。しかし、アンケート調査やインタビュー調査の結果から、a～eのうちの1項目ではなく複数の項目にわたる活動を実施している園もあることが分かった。また、枠組みには収まりきらない多様で特色ある取組が行われていることが明らかとなったため、「f. その他 特色ある事例」を新たに付すこととした。

- a. 外国籍の幼児の入園を機に、他の国の言葉や文化への関心をもち広がる事例
- b. 地域に住む外国籍の方や卒園生が園を訪問し、その国の言葉や文化を紹介する事例
- c. 外国籍の講師が、定期的に園を訪問し、園生活を共にしながら交流する事例
- d. 外国での生活経験をもつ保護者が、言葉や文化を伝える事例
- e. 遊びにALTが加わり、外国籍の幼児の遊びの援助や他の幼児に英語での問い掛けを行うことにより、多文化理解の感覚をもてるようにする事例
- f. その他 特色ある事例

a～fの視点から選定した園では、子供たちが日常の園生活の中で多文化に親しめるよう、様々な工夫が凝らされている。これらの実践はこれから「多文化を楽しむ心」を育む実践に取り組む予定や、既に取り組んでいるけれど困難さを感じている幼稚園等にとって、大きな示唆を与えるものである。

（1）取材園の概要

アンケート調査の結果から、今後「多文化を楽しむ心」を育むために、より特色ある活動を展開しようとする幼稚園等にとって参考となる実践を積上げている園を選定し、インタビュー調査を実施した。抽出に当たっては、単に外国人講師の配置や外国人幼児の在籍といった「状況の有無」ととどまらず、園がどのように子供たちの「多文化を楽しむ心」を育むことへとつなげているか工夫しているのか、という点に着目した。

インタビュー調査では、園(所)長と担当教職員へのインタビュー、活動の見学、提供資料からの検討等を通して、日常の保育に「多文化を楽しむ心」を育む実践がどのように取り入れられているかを多角的に把握することに努めた。これらの調査を通じて、各園が園の状況や地域の環境を踏まえ、「多文化を楽しむ心を育む」ためのカリキュラムや園運営において、どのように工夫を行っているのかを捉えることができた。

（2）研究協力園の概要

研究協力園の選定に当たっては、園の日常の保育の中で子供たちが多文化に触れ、楽しみ、理解を深められるように、カリキュラム、指導、環境等について、組織的かつ継続的に整えているかを重視した。また、上記a～fのいずれかに特徴的な取組を行っていることを考慮して選定し、その内容を研究協力園より報告していただいた。

これらの園では、単発的なイベントや行事にとどまらず、多文化理解の要素が計画的に組み込まれていることに着目した。ここでの多文化理解の要素とは、子供たちが自国の文化と異

なる文化に気付き、その違いを肯定的に受け止めながら、多文化への関心や理解を深めていくことを意図した内容を指す。それらは、日常的な経験の中で自国と諸外国の文化を関連付けて理解できるよう、カリキュラムや指導、環境構成の中に計画的に組み込まれるよう設計されている。さらに、在籍する子供の状況に応じてカリキュラムが調整されていること、子供たちが自然な形で多文化に触れられる環境が整えられていることにも注目した。加えて、教職員間で多文化に関する共通理解が形成され、組織的に取組を進めていることにも着目した。

いずれの研究協力園も園全体として、日常の保育の中で、自国の文化に親しむとともに子供たちの興味や気付きを丁寧を受け止めながら多文化を楽しむ活動へとつなげている。

※本調査研究に掲載している園は、幼稚園、幼保連携型認定こども園、保育所である。子供、こども、子ども、教員、教諭、教師、保育士、保育者、学級、クラス等の表記は、各園の報告を基に使用している。また、英語講師、ALT、ET、保育スタッフ等も、各園で使用している呼称である。

3.「多文化を楽しむ心」を育むための特色ある取組の報告

(1)「多文化を楽しむ心」を育むための特色ある取組の報告

学校法人愛泉学園 吉田保育園（栃木県）

「外国籍A児の入園をきっかけにして、子供たちの世界が広がる」

キーワード：異国の友達との出会い(a)、外部講師による「英語あそび」活動(c)、
Japanese style(f)

① 園の特色・地域の実態

【園の規模】0歳～5歳児のクラスで構成され、園児数は26名（2025年12月1日現在）

【保育理念・保育方針】子どもの最善の利益を第一とし、家庭や地域との連携を図り、子供の発達を促す。生きる力は学びの中にあり、学びは遊びの中にある。乳幼児期に必要な学びは、楽しいと思う遊びを見つけることから始まる。子供の育ちに適した環境（自然、モノ、ひと、空間、時間）を提供し、それらに触れることで知的好奇心を刺激し、豊かな創造性を育んでいく。

【園の特色・地域の実態】地域の小学校の3校が廃校となり、1校に統合されている過疎地域にあるが、自治体や地域の要望で保育所は存続されることになり、3年前に公立から民間へ移管された保育所である。移管前の保育方針やカリキュラムなどを継続してほしいという要望を受け、地域とともにある本園らしさを実践している。保育時間内で行う外部講師によるリトミックや体力づくり、英語遊び、アート活動を新たに取り入れ、園が農村地区にあることから食育活動（栽培体験、クッキング体験）や農業活動（田植え、稲刈り、脱穀、収穫体験など）は継続し、新たに活動を増やすことで、地域の自然や特色を感じることができる保育を実践している。

【実践の紹介】令和6年4月、外国籍の孫を入園させたいと祖父が見学に訪れた。その約3か月後、両親の仕事の都合で一時帰国した4歳児A児（父：アメリカ人、母：日本人）が、一時預かり保育事業を利用し、7・8月の2か月間在籍することとなった。母親からは、「特別扱いせず、在園児と同じように生活や活動をさせてほしい」との希望があり、A児は異年齢（3～5歳児）クラスで過ごした。園では、保育の一環として外部講師による「英語遊び」を行っており、在園児にとって外国籍のA児を受け入れることに大きな違和感はなかったようである。しかし、英語ネイティブであるA児との会話はぎこちなく、言葉が十分に伝わらなかった。それでもA児と積極的に関わろうとする姿が見られ、子供たちのコミュニケーションは必ずしも「同じ言語」ではなく、違っても気持ちを伝え合っていた。

② 活動の背景

3～5歳児は在園児が11名であることもあり、異年齢保育を行っている。園としては初めて外国籍の子供を預かるケースだったが、特段の障壁もなく、むしろ楽しみに受け入れることとなった。マニュアル（カリキュラム）はなく、母親の「日本の保育園の保育を経験させたい」との強い希望があったため、普段通りに、生活を中心に遊びや活動も同じように過ごす中で様々な経験することとなった。

③ 活動の展開 4歳児・5歳児（外国籍のA児のネイティブの発音は、英語にて表記）

★入園当初のA児の姿

A児は、登園することを嫌がることはなかったが、初登園の日、なかなか保育室に入って行けない様子が見られた。靴を脱ぐ、シューズを履くという生活習慣の違いに戸惑っていた様子だった。その様子に手を差し伸べたのは言葉の発達に遅れが見られる男児であった。言葉のやり取りより、脱ぐ、履く動作を見様見真似で伝えていく姿は、言葉だけがコミュニケーションではないと感じた。それ以後、園生活の中でも2人はとても仲良く、昼食も向かい合って食べたり、隣で食べたりと、気の合う仲間としてランチを楽しんでいた。在園児は、2年半続けている「英語あそび」活動の成果を発揮してほしい担任の思惑は外れ、英語で話し掛ける姿はあまり見られず、むしろ堂々と日本語で話し掛ける姿が見られたていた。

★外部講師による「英語あそび」活動に参加して

外部講師による「英語あそび」活動（週1回35～40分の間）に初めて参加した日は、A児は見ているだけで、加わることはなかった。ただ、英語の歌には体を揺らす姿は見られた。講師の問い掛けには答えることはあったが、在園児が話し掛ける英語には全く応じず「ちがう」と日本語で言い返していた。A児はあまり物怖じせず、何でも言いたいことを言えている様子だったので、保育者が「なんて言っているかわかる？」と聞くと「わかる」と言うが、在園児の問い掛け「ファッツカラードユーライク？」には全く答えず、「へんなの」と答えるだけだった。

数日後に、地域の方からジャガイモを掘りに誘われ、みんなでたくさんのジャガイモを収穫して、採ってきたジャガイモを調理して食べることになった。好奇心旺盛なA児は「potato!」（ネイティブの発音）と言ったとき、他の園児は何を言っているのか分からない様子だったが、A児が発する言葉と茹でたジャガイモを見ながら、同じように「ポテト!」と嬉しそうに声をあげた。「英語あそび」活動で知り得た「ポテト」が、A児が発するネイティブ発音の「potato」と同じだということを体験の中で実感しているようだった。

A児が発する単語やジェスチャーをまねすることで、一体感が生まれ、同じ気持ちを表現していた。例えばA児が「OH、Noooo～」と言うと、みんながつい笑ってしまう。A児は笑ってくれると許されると思っている。他児もそれをまねすると許されると思ったのか、それとも笑いをとりたいたのか、しばらくの間クラスの中で「オゥーノ～～～」が流行っていた。

4歳児



シューズを履く



ジャガイモを食べる



お祭りに参加

★入園して3週間が経過したA児とクラスの子供の姿

A児は好奇心が旺盛だったこともあり、不思議だと思ったことや気が付いたことに「これなあに？」と聞くようになり、知り得た日本語を「これは〇〇だねえ～」と言うことが多くなった。クラスの間なども慣れ始めた頃、暑い日が続いたこともあり、数日の間に男児数人が次々と坊主頭に髪を切ってきた。お迎えの時にその子たちを見たA児の母親は、汗かきで肌の弱いA児に汗疹ができていたし、ちょうどよいからと言って同じようにA児を坊主頭にヘアカットしてしまった。これには担任も驚いたが、坊主頭達には妙な連帯感が生まれ、親密性が増したように感じた。A児も「Japanese style!」と言い、気に入っている様子だった。

★5歳児に再び園に戻ってきて・・・

12月中旬に再び在園することになった。A児はすっかり髪を伸ばし、背も少し高くなっていて、何より日本語が上手になっていた。在園児達はA児のことを覚えており、入園の初日こそよそよそしい感じがあったが、数日ですっかり慣れ、A児の発するイントネーションの違う日本語と在園児の少しネイティブっぽい英語が飛び交っている。例えば「アメリカではねえ…」と日本との違いをA児が説明してくれると、在園児のY児が「Here You are」と地図の絵本を渡す、A児は「thank you」と応えるなど、すっかり園内がAmericanな雰囲気になっている（担任談）。A児が世界地図の絵本からアメリカの旗を見付けて「ここからAirできた!」と教えてくれるとクラスがアメリカの話題でもちきりになる。また、A児の父親がお迎えに来てくれた際には、A児が今日あったことを英語に通訳して伝える場面を見ると在園児たちはリスペクトの眼差しを向けるのだった。A児が帰国してしまった後の在園児は「apple」他の発音がネイティブっぽくなり、「英語あそび」活動に生き生きと参加するようになっている。

<保育者の願い>

一人一人が、その子のペースで園生活が過ごせるように見守っていきたいと考えている。なので、外国籍のA児の受け入れは多様性を受け入れ、みんな違っていいことを体現できるチャンスだと思っていた。保育者が自然にA児に接することで、A児が特別な存在ではないことを在園児にも伝えたかった。A児には、日本でしか味わえない文化を経験し、アメリカに戻った後も同じように互いを尊重できるようになってほしいとの願いがあった。互いにとって願ってもない機会であったことを感謝している。

5歳児



異年齢児との関わり



父親も交流



書き初め

④ 園運営上の必要となること（園長の役割を含む）

- ・ 園長は園の代表として保護者対応の最前線に立つことを意識している。特に、制度や費用に関する説明、クレームになりかねない事案への対応、職員のミスがあった場合の謝罪など、矢面に立つ意識がある。これにより、担任は保育に集中できる体制を築いている。
- ・ 今回の事例では、日本語がほとんど話せない父親がアメリカ人で母親が日本人の子供の受け入れについて、他の施設で断られた後、祖父からの連絡を受け園長が受け入れを決定した。入園の申請手続きが間に合わず「一時預かり」として対応するが、何かしらの補助対象にできないか、市の担当と随分やりとりをした。利用料が負担軽減できることになったことを保護者は大変喜んでいて。
- ・ A児の父親が英語しか話せないことを知り、父親を園内に招き入れ、在園児と積極的に関わることを奨めた。園長は、地図や国旗を通じて異文化に触れる環境を提供していきたくと考えており、ふさわしい機会だと感じていた。また、このことを通して、英語を話すA児を自然に当園の仲間として受け入れたいと考えていた。
- ・ 保護者との主なコミュニケーションツールとして「LINE WORKS（アプリ）」を導入していたので、日々の子供の様子を写真付きで報告することで、安心して預けられるように配慮していた。また、送迎時間の連絡など、やり取りをアプリ上で行うことにより、伝達ミスなどのトラブルを防ぎ、信頼関係の構築ができています。また、職員間の情報共有にもLINE WORKSのグループチャットを活用し「〇〇さんのお迎えです」といった連絡を一つ入れるだけで、全職員がリアルタイムで状況を把握できるため、インカムやメモの必要がなく、効率的な連携が取れている。特別なカリキュラムの作成はしていないが、重要なことは常に子供たちに異なる文化を取り入れる素地をもたせることだということを理解して保育することであり、その体制を整えた。

⑤ 子供が経験し学んでいること

A児は、アメリカでは見たことのなかったカブトムシに強い興味を示していた。4歳児の時には5歳児から遠足で捕まえてきたカブトムシを見せてもらおうと、非常に驚き、触ったりして喜んでいて。それ以降も、日本にいる虫とアメリカにいる虫の違いに興味深く図鑑などを使いながら調べる姿が見られた。

担任は、英語が話せないので通訳アプリをダウンロードして準備していたが、使うことはほとんどなく、「A君とのコミュニケーションは何かかなるでしょう」と言っていた。不安がないわけではないが、A児の興味をもっていることにアプローチできるかを配慮していた。友達と関わること、クラス全体で楽しむことは、A児がいてもいなくても同じであると感じていた。それぞれ本人のペースに合わせ、無理なく過ごせるように配慮した。

当初、母親や父親から離れて寂しさを感じるも、性格的にやりたいこととやりたくないことがはっきりしており、遊んでいる時はとても楽しそうだった。むしろ、あまり興味のない活動に参加することに課題があった。A児だけでなく在園児のペースにも合わせながら、次に興味をもつことへ視線を変えるなどの工夫をした。

社会福祉法人桜福社会 認定こども園こどものもり(埼玉県)

「日常生活に溶け込む多文化環境」

キーワード：外国籍の保育職員の受け入れ(c)、多言語への自然な触れ合い(c)、
地域ぐるみのハロウィン(f)

① 園の特色・地域の実態

【園の規模】園児数は96名

教職員は27名 留学生スタッフ随時 外国籍保育職員は10月末現在2名
そのうち、外国にルーツのある子供の在園数は2名

【保育方針】「全てこどもの最善の利益」を前提とし、「子ども主体で、温かな園生活体験を通して基本的な生活体験を身に付けていく」

- ・異年齢生活を通して、お互いの尊敬や感謝の心を身に付けていく
- ・園舎・自然を含め家庭的で温もりのある環境に心がける
- ・子ども主体を優先し、自分でやってみたくなる保育環境を整える
- ・観る、聴く、触る、食する、動くなど感覚を生かした体験を大切にする

【園運営】中央にランチルームを配し、子供たちが年齢にこだわらず自由に行き来でき、交流がもてる木の温もりと自然環境の豊かな幼保一体型施設。異年齢やコーナースystemの保育では、高い評価を得てきた。また、地域社会とのつながりを大事にし、共に文化を創造し向上させていく理念に支えられている。園長自身の留学経験から、異文化や多様性を特別視せず、全てを自然な暮らしの一部として捉え、個性として認め受け入れる考え方が園全体に根付いている。

【園の特色・地域の実態】自然が豊かで住宅地が多い松伏町にある。平成18年に埼玉県第1号の幼保連携型認定こども園として認定された。

「異年齢保育」については、子供を中心にした保育を基本理念とし、幼保に拘ることなく年齢の違う子供同士が互いに助け合い・支え合い、信頼と尊敬できる体験のできる「一軒の家」と考えている。園が、赤ちゃんから就学前までの子供が、温かな生活を通して、社会で必要なマナーをきちんと身に付けていくための場となるように考えている。

園舎や園庭の全ては、子供たちの心が豊かになり、意欲が育つための環境として位置付けている。園舎内外に一人一人が、自らの意志で自己充実感や達成感が体験できるよう体験と学びのできるコーナーを設定し、より質の高い興味や関心を生み出せる場となるように工夫している。また「させる保育」から「してみたくなる環境」を目指し、保育者が一斉に指示し指導するのではなく、子供自身が興味や関心のある活動を選んで取り組み、自己充実できるように工夫をしている。

② 「カリキュラムとの関連」又は「活動の背景」

町に音楽ホールを建設するためにオーストリアへ視察に行ったことをきっかけに、町の国際交流協会はオーストリアのグライズドルフ市との交流を開始する。中高生の交換留学プログラムは20年以上続いている。園長が協会会長をしている。園はこの活動を支援し、在園児の家庭でホストファミリーをしたり卒園生も多く参加したりして、自然な形で国際交流への関心が広がっている。

ウィーン大学日本語学科の学生を研修生として受け入れている。外国籍の保育スタッフとして日本語が話せなくても、常に1名は採用をしている。滞在期間は3ヶ月と短いですが、職員として給与も支払われる。研修生がいつでも来られるよう、園側で専用のアパートを契約し、安定した住居も提供している。

③ 活動の展開

★地域を巻き込んだ表現活動：こどものもりのハロウィン

こどものもりのハロウィンは、約30年前に始まった。当時、日本ではほとんど知られていなかったが、園長が20代の時に留学先のカナダで大人も子供も仮装をして楽しむハロウィンを体験し感動したことから始まったものである。10月中頃から絵本や年長児の昨年のハロウィンの話を通して、子供たちは「自分は何に変装しようか」を考える。何日もかけて家庭から材料を持参し衣装作りをする。自分で作れる年長児から始まり、できた衣装や小物を紹介することで、年下の子もイメージが湧き作り始める。年下の子の衣装作りは、年上の子がその子の作りたいイメージを聞き、「これはこうすると良い」とアドバイスをしながら手伝ったりもする。みんなの衣装が完成したら、ファッションショーをして見せ合う。

ハロウィンの当日は、仮装した保護者、保育者と一緒に市役所、地域の銀行や子育てセンターなどにパレードしながら行き、お菓子をいただく。園に帰ってきた後は、みんなで衣装紹介や歌、ダンスなどを楽しむパーティを行う。毎年、大人も子供も地域の方も、みんなワクワクと感動に満ちたハロウィンとなっている。保護者にも、見るではなく、参加希望者は当事者として一緒に楽しむよう、仮装しての参加を促している。

単なるお祭り騒ぎではなく、園生活を通して「互いの意見や考え方を発信し合い、それぞれの思いの違いを理解し合う」体験として計画されており、「表現コーナーの活動計画」で、自分の考えを実現する具体的な方法の一つとしている。子供が「なりたいもの」に変身し、他者との交流を深める「表現活動」としてカリキュラムには位置付けられている。

★オーストリアの短期留学生たちとの交流

園長が会長をしている松伏町の国際交流協会事業では、オーストリア・グライズドルフから1年おきに中高生20名が、夏に松伏町にホームステイにやってくる。毎回、保育スタッフや在園児、卒園児の家庭がホストファミリーになる。ちょうど夏祭りの時期であるため、一緒に浴衣で来園し、夜店ごっこや盆踊りを子供たちと一緒に楽しむ。初めての盆踊りも子供たちに踊りを教えてもらい、夜店ごっこでも魚釣りやボーリング、かき氷を子供たちに誘導してもらうなど、様々な日本の夏を体験している。留学生も子供たちも一緒に活動することで、言葉が通じなくてもジェスチャーで通じ合い、笑顔で交流を楽しむ姿が見られる。

また、行事ではない時もホストファミリーと一緒に来園し、一緒に遊んだりしている。子供にとって、異国の大きいお兄さんやお姉さんとの交流は、貴重な経験になっている。

④ 園運営上の必要となること（園長の役割を含む）

- ・ 園が地域と連携して活動できるように、教育委員会が園児のハロウィンの活動写真を撮って園に提供する等、日頃から良好な関係を築いている。
- ・ 園は地域から何かを得るのではなく、地域文化の向上のために「発信する」という姿勢を大切にしている。
- ・ 国際交流が特別なプログラムではなく、園生活の中に外国籍スタッフとして自然に溶け込むことを重視している。このため、異文化や多文化との出会いを特別視せず、「ごく普通のこと」として捉えている。
- ・ ウィーン大学からの短期留学生（ドイツ語、英語）や中国籍スタッフなどが在籍。過去には韓国やオーストラリア、カナダ、フランス等、様々な国の留学生を受け入れてきた。

⑤ 子供が経験して学んでいること

ウィーン大学からの短期留学生受け入れや外国籍の職員がいることで、英語で話し掛けられたり外国語の絵本を読んだりして多言語に触れる機会があり、多文化に親しんでいる。

ハロウィンの活動は単なるお祭り騒ぎではなく、子供たちがなりたいものに変身し、異年齢や地域の方々との交流を深める表現活動となっている。また、地域全体が歓迎ムードの中で、親子で多文化を楽しむ体験になっている。

千代田区立九段幼稚園(東京都)

「共に遊び生活する中で、園の一員として刺激し合うALTの存在」

キーワード：遊びや生活を共にする(e)、互いを受け入れ合う(e)、互いに伝え合う(e)

① 園の特色・地域の実態

【園の規模】3歳児、4歳児、5歳児のクラスで構成され、園児数は46名

そのうち、外国にルーツのある子供の在籍数は3名（2025年12月1日現在）

【教育目標】心動かし自ら関わり 人とつながり思いやる じっくり考えやりぬく子

「わくわく にこにこ じっくり遊ぶ子」

【園の特色・地域の実態】併設小学校が同一敷地内にある公立幼稚園である。近隣には大学などの学校や大使館がある閑静な住宅地である。官庁が多いため、在園児の転入出が多い。

【実践の紹介】令和7年に「英語教育推進委員会」が区教育委員会に設置され、併設小学校にALTが年間190日派遣されることになった。それに合わせて本園もALTの派遣が週2回に増えた。そこでクラスタイム（歌やゲームなどの一斉活動）とフリータイム（好きな遊びの中での関わり）を、週1回ずつ行っている。

② 「カリキュラムとの関連」又は「活動の背景」

以前は区教育委員会に在籍している外国籍の講師が、区立の各小学校・園を訪問し、英語活動を推進していたが、平成16年頃より、国際理解教育の推進として区内の全区立園にALTが年に3回程度派遣されるようになった。その後、年間6時間（1時間×6回）、区教育委員会が契約している民間企業より派遣されるようになった。その時間は、英語でのゲームや手遊び・歌・絵本など英語に親しむ活動、ALTとの触れ合いを楽しむ活動を行ってきた。

【令和7年度教育課程「2 指導の重点」より】 ※区教育委員会に提出

「豊かな国際感覚」を学校2020レガシーとして位置付け、異なる文化に関心が広がるよう、ALTとの活動をきっかけに、日常生活でも、外国籍の幼児の母国や母語・文化などに関心をもち、異文化にふれる機会をつくる。さらにALTを介した小学校低学年との日常的な交流・連携を深めることで、英語への関心とともに、国際理解の意識の芽生えを培う。

<ねらい>

- ・他国の言葉や文化に触れ、世界には様々な国の人がいることを知り、親しみを感ずる。
- ・日常生活の中で英語(外国の言葉)に興味や関心をもち、外国の歌や手遊びを楽しんだり、自らALTに関わり、コミュニケーションを楽しんだりする。

③ 活動の展開 3歳児・4歳児・5歳児

★コマ回し一緒にしよう！（フリータイム）（5歳児）

フリータイムでは、子供たちがそれぞれの興味や関心に応じて遊んでいるところにALTが行き、遊びの様子を見守ったり、一緒に遊んだりしながらコミュニケーションを図っている。

コマ回しを楽しんでいた数名の子供たちのところに、ALTのJ先生が近付き、様子を見ていた。「J先生、コマ回し知ってる？」とA児が尋ねると「トップ！」と英語で応える。名前は知っているが



遊んだことはないことが分かり、回し方や、ひもの巻き方をやって見せながら説明し、一緒に取り組む。

★雅楽をM先生（ALT）に見せよう！（フリータイム）（5歳児）

地域にある神社の方々から雅楽を見せていただく機会があった。その日、M先生は都合が合わず、見るができなかった。そこで、5歳児の子供たちが、「M先生は、雅楽を知らないと思う」「見せてあげたいね」と話し合い、自分たちで雅楽の楽器を手作りしたり舞の練習をしたりなど準備を進め、M先生を招待し、披露した。



M先生が「ワーオ!」「アメイジング!」と反応したことを喜び、満足感へとつながった。

★3学年それぞれの一斉活動(クラスタイム)

子供たちに、日頃馴染みのある絵本の英語版の読み聞かせや知っている手遊びを英語ですることから始めた。

英語の分かる、外国籍の子供が喜ぶ姿も見られている。



一緒にゲーム

④ 園運営上の必要となること（園長の役割を含む）

- ・ 目的は英語を話すことではなく、幼児期に多様な人と積極的に自分の力で関わり、外国の方と接する機会が大切であると考え。
- ・ 幼児の遊びにALTが自然に参加するようになったことで、子供たちの生活の中にALTの存在が位置付いてきている。
- ・ ALTは幼児教育者ではないので、フリータイムには難しさもある。しかしフリータイムを重ねる中で、ALT自身が一斉活動で言葉を教えるだけでなく、コミュニケーションの中での自身の役割を感じ取るようになってきている。
- ・ 多様な文化に触れる中で、園の教育活動における意図を伝えるために、今までのやり方にこだわらず柔軟に考え、自分たちが「園の文化」を見直すようになっている。

⑤ 子供が経験し学んでいること

遊びの中で、自分たちがしていることをALTに知ってほしいという気持ちから、言葉だけでなくジェスチャーや表情など自分なりの方法で伝えようとしている。それは言語だけでなく表現であり、「伝えたい」という思いが基盤にある。また、ALTも日本語を学ぼうとし、子供たちが教える場面もある。担任自身も、ALTと共に過ごす中で表情やジェスチャーをよく見たり様々な方法で発信したりするようになった。その姿を子供たちも見ており、互いに受け入れ合う姿につながっている。学級には外国籍の子供や言葉でのコミュニケーションが難しい支援が必要な子供も在籍している。ALTとの関わりも含めた様々な経験の積み重ねを経て、言葉がなくても相手の気持ちを汲み取ろうとする関係性が育っている。

港区立芝浦幼稚園（東京都）

「遊びと生活に根ざした国際理解教育の展開」

キーワード：遊び・生活に根ざした国際理解(e)、 NT（ネイティブティーチャー）との協働(c)、多文化共生・関わりの拡張（園・家庭・地域を巻き込む）(e)

① 園の特色・地域の実態

【園の規模】園児数は76名 そのうち、外国にルーツのある子供の在籍数は8名

【教育目標】元気いっぱい 笑顔いっぱい 夢いっぱい 育つ 芝浦の子

【園の特色・地域の実態】保護者の教育への関心は非常に高い。また、併設の学校、保育園もあって、地域がとても幼稚園に対して協力的で、人との関わりをもてる機会が多くある。英語の取組を始めた当初は英語活動＝早期教育（お勉強）と捉える傾向があったが、正門でのNT（ネイティブティーチャー）による挨拶運動や行事参加を通じ、親しみが醸成された。現在では「遊びを通じた豊かな体験」としての理解が進み、肯定的な反応が増えている。全園児の約1割以上（4月時点で約13%）が外国籍または外国にルーツをもっている。自然環境に恵まれ、近隣施設や地域住民も協力的であるため、人との関わりを重視した園経営を行っている。

【実践の紹介】形式的な学習ではなく、遊びや生活の中で自然に英語や異文化に触れることを最重要視したNTとの活動が2年目となった。現在は英語が日常の一部として定着した。遊びの中でNTとの関わりでは、自然な発語が見られている。

② 「カリキュラムとの関連」又は「活動の背景」

・港区国際理解教育について

港区ならではの幼児期から義務教育修了までの国際理解教育に関する取組等を体系化するため、「港区国際理解教育プログラム」を作成しました。

策定の目的

港区ならではの「幼児期から義務教育修了までの国際理解教育」について、目指すべき方向性と取組を「言語」「伝統」「共生」の3つの領域で整理し、年代ごとの到達目標と子どもの姿を明らかにして体系化するため、「国際理解教育プログラム」を策定しました。

港区の国際理解教育が目指すもの

グローバル化の進展する国際社会において、国籍や障害の有無にかかわらず、将来、真の国際人として活躍できる幼児・児童・生徒を育成します。

全ての幼児・児童・生徒が、英語に親しみをもつだけにとどまらず、異なる文化や価値観を持つ人々を理解するとともに、自分の国や文化について深く知り、その価値を理解した上で他の国の人も堂々と渡り合える人材となるよう、育成に努めます。

（港区ホームページより抜粋）

港区国際理解教育プログラムの策定と受けて、区立幼稚園全園共通の【港区スタンダード】港区立幼稚園 英語による活動 年間指導計画（モデル案）を作成し、各園で運用を開始している。港区立幼稚園12園にNTが週3回派遣されている。

カリキュラムは区内担当12園で協議・検討。芝浦幼稚園でも担当教諭が、芝浦幼稚園としての計画をコーディネートしている。講師派遣や大卒の計画は教育委員会および業者が行っている。

るが、園の実情に応じて保育への導入の仕方が検討され、各園の実情に応じて計画が立てられている。導入当初は、活動そのものをNTに活動を丸投げしてしまう傾向があったが、現在は担任が主体的に関わり、教育課程の中に英語活動をどう位置付けるか意識するようになってきた。

教材は、委託業者から教材も提供されているが、提供された教材をそのまま使うのではなく子供の発達段階（特に3歳児）や園の状況に合わせて柔軟に取捨選択して、各園の保育の計画や子供の様子に応じて、歌や遊びなど活用をしている。形式的な学習ではなく、遊びや生活の中で自然に英語や異文化に触れることを最重要視している。導入当初の抵抗感はなくなり、2年目の現在は英語が日常の一部として定着した。遊びの中で自然な発語が見られ、普段おとなしい子供が積極的に関わろうとするなど意外な一面も引き出されている。

日本人の保育者にとっても、NTの表現（「Yeah!」など）や、子供を褒める際の表情、切り替えの早さなどは、自身の保育スキルとして取り入れている。英語等の習い事に通う子供が多い地域であるが、習い事の実験がない子供でも、NTを「特別な先生」として慕い、関わりを通じて「楽しい」と感じることで、異文化への戸惑いが払拭されている。

③ 活動の展開 5歳児

★NTとの関わり：「一緒に遊ぶ先生」

子供の遊びにNTが積極的に関わり英語を使って一緒に遊びを楽しんでいる。年長児が絵画活動を行っていた場面では、子供が「大根って英語でなんて言うんだろう」といった疑問を自然に口にし、NTに尋ねている姿が見られる。

NTとの関わりが2年目となる年長児は、NTの在を日常の一部として受け止めており、抵抗感ほとんど見られない。「一緒に遊ぶ先生」の一人として自然に受け入れられている。

また、NTは遊びの楽しい雰囲気作りが上手であり、鬼ごっこなどの遊びと一緒に入ることで場が明るくなり、子供たちは「ちょっと特別な先生」と遊べることを楽しんでいる。このことは、英語への親しみだけでなく、対人関係の広がりや遊びの質の向上にもつながっていると考えられる。

★5歳児年長きく組の事例：「新しい出会いから広がる多文化理解の楽しさ」

昨年度に関わりのあったNTとは違うNTが派遣された。子供たちは、昨年度1年間の活動を受けて、英語に興味や関心をもつようになっていたが、初めて会う新しいNTに緊張するA児もいれば、自分から挨拶を英語、その後は日本語で話し掛けるB児もいた。

週に2回、遊びや活動の中でJ教諭と関わるうちに、子供たちは段々と親しみをもつようになった。特に、9月中旬頃に歌った「banana of the world unite song」はお気に入り、バナナになりきって動いたり歌ったりすることを楽しんでいた。A児もこの歌は思い切り楽しむ様子が見られた。12月に行われた、子ども会の活動の際には、本番の直前に、担任自身がNの歌い出した際のテンションや雰囲気、ジェスチャーなどをまねして、クラスの子供たちと一緒に歌うことで、適度にリラックスした状態で、本番に臨むことができた。

★国際理解ウィークで広がる興味関心

今年度は全園で国際理解ウィークを設け、日本や他国の文化に触れたり、日頃の英語活動での取組を生かして、複数の幼稚園ネイティブティーチャーと関わったりする活動をしています。芝浦幼稚園では、10月6日から10日まで、国際理解ウィークを設定しました。中秋の名月の6日には、全学年でお月見の会をし、日本のお月見文化に触れました。

8日は、メインデーとして「幼稚園発！世界とつながるワンデートラベルデー」を開催しました。様々な国出身の10名の幼稚園ネイティブティーチャーとともに1日を過ごしました。

メインの活動では、オリジナルのパスポートを持って飛行機に乗り込み、様々な国に旅をして、その国の食べ物を食べるというストーリーのもと、日頃の英語活動で取り組んでいる英語のフレーズを使って、お店屋さん役の幼稚園ネイティブティーチャーとのやり取りを楽しみました。

最終日は、誕生会で日頃の英語活動で楽しんでいるダンスや体操を楽しみました。国際理解ウィークの取組は保護者の方にも公開し、日頃の英語活動の他、ワンデートラベルデーも参観していただきました。子どもたちが幼稚園ネイティブティーチャーの皆さんとやり取りをする姿を見て、「万博みたいですわね！」という感想も聞かれました。



Two hamburgers, Please!



Thank you!

Here you are.

(芝浦幼稚園Xより抜粋)

★登園時のNTとの挨拶を通した子どもの変化

本園では、登園時に正門でNTが立ち、必ず子供たちに挨拶をしている。4月当初は、恥ずかしさから挨拶をためらう様子や、日本語以外の言葉を話す大人に対し「どのように関わればよいのか」戸惑う様子が見られた。そこで、保護者と教職員がモデルとなり、NTに対して笑顔で英語の挨拶を交わす姿を子どもに見せるようにした。保護者が明るい表情でコミュニケーションをとる様子を見て、子供たちは次第に安心し、ハイタッチをしたり、笑顔で応じたりしながら、自分から英語で言葉を掛けてみようとする姿が増えていった。

現在では、NTが「How are you today?」「That's a nice outfit.」などと声を掛けると、子供たちが動物の名前を英語で言うなど、自発的な英語でのやりとりが見られるようになっている。

正門での挨拶の取組は、他園（高輪幼稚園・麻布幼稚園）の実践を参考に、本園の生活のスタートとして位置付けたものである。子供だけでなく、保護者や地域の方々にも「園にNTの先生がいる」ことを自然に知ってもらい、親しみをもって関わってほしいというねらいがある。立ち位置については、NTを正門付近に、その少し先に園長（または担任）が立つ形に落ち着いた。当初は一緒に受け入れていたが、子供たちがどちらにどのように挨拶するかを観察しながら試行錯誤を重ねた結果、現在の配置が、子供とNTとの関わりを促すうえで効果的であると考えている。

④ 園運営上の必要となること（園長の役割を含む）

- ・ NTとの協働により教材や活動を共に検討する中で、教員が幼児教育の固定観念を広げ、保護者や地域の関心も高まりつつある。保育参加を通してNTの活動を見た保護者からは、子供の新たな一面への気付きや、「早期教育」とは異なる学びの価値を実感する声が多く寄せられ、園内では概ね肯定的な評価が得られている。また、「英語活動＝早期英才教育」という発想から離れ、国際理解教育を幼児の遊びと生活に根ざした経験として再構成されている。
- ・ 教材、ICT・外部教材を目的化せず、発達段階や園の実態に即して取捨選択している。区全体で共有されたスタンダードと園独自の柔軟なカリキュラム運用を組み合わせることで、「委託任せ」ではなく、幼稚園教育要領に基づく教育課程の一要素として英語活動を位置付けられるようになっている。一方で、成果をさらに高めるためには、NTとの事前打ち合わせや振り返りの時間を、多忙な業務の中でいかに確保するかが挙げられる。
- ・ NTの表現や関わり方から、褒め方を園の教員が学び、自らの保育に取り入れている点は、国際理解教育が「子供のための英語」だけでなく、教員の専門性向上につながっていることが捉えられる。課題としては、取組や意図を十分に外部へ発信や日々の保育場面も含めた情報発信の方法が挙げられている。

⑤ 子供が経験し学んでいること

登園時の挨拶や自由遊び、国際理解ウィークなど、多様な場面にNTが関わることで、子供にとって英語は「特別な時間の言葉」から「日常を豊かにする表現」へと変容している。おとなしい子供が自ら英語で発語したり、新しいNTにも自ら関わろうとしたりする姿は、その内面の安心感と、異文化への抵抗感が低くなった姿として捉えられる。また、保護者にとっても、活動の公開や国際理解ウィークの参観を通して、「勉強としての英語」ではなく、「人との関わりを広げる経験」としての価値が共有されることで、園生活だけでなく子供の生活全体に多文化理解が広がっている。

港区立南山幼稚園(東京都)

「幼児期から一貫した国際理解教育の推進」

キーワード：言葉や文化への関心促進(a)、多言語への応答性(e)、
多文化を反映したカリキュラム(f)

① 園の特色・地域の実態

【園の規模】3歳児、4歳児、5歳児のクラスで構成され、園児数は53名

そのうち、外国籍の子供の在籍数は22名（2025年11月17日現在）

【教育目標】「○げんきな子 ○よく考える子 ○なかよくする子」

【園の特色・地域の実態】港区元麻布にあり、南山小学校と同敷地内にある公立幼稚園

【実践の紹介】日本も含め14の国や地域（アメリカ、メキシコ、中国、台湾、シンガポール、ベラルーシ、イギリス、ウズベキスタン、オーストラリア、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、韓国等）の子供が在籍している。子供たちの母語は英語だけではないが、英語を話す保護者の割合が高く、また英語が家庭の言語の子供も多い。

② カリキュラムとの関連

港区立幼稚園は、小学校、中学校とともに、港区の学校教育推進計画に基づいて教育課程が編成されており、その中の重点事業の一つに「国際理解教育の充実」がある。幼児期から一貫した国際理解教育の推進のため、2024年5月よりネイティブティーチャー（以下、NT）が各園に週3日勤務している。

英語活動は週3回、水・木・金に約10分間程度実施する。ゲーム等は10分に限らない。それ以外に、主に年長クラスに外国につながる子供が多いため、そこを拠点としながら他のクラスの活動に参加する。NTは、英語に親しむための活動の時間だけでなく、幼稚園の教育時間全てにおいて、遊びの中で子供と関わる。そのため、遊びの中で自然と英語が耳に入る環境となる。また、NTは日常生活の中で英語が母語の子供が自分の思いを十分に表せないとき、他の子供や保育者が話す日本語の理解が十分でないときなど、対象児に寄り添いながら言葉を導いたり知らせたり、通訳したりしており、コミュニケーションの橋渡しの役割となる。NTに英語で説明してもらうときには、日本語と交互に話すようにしている。

③ 活動の展開

★日常の保育活動における取組：多文化を反映したカリキュラム

毎月の誕生会で、国旗の紹介、国の様子・風景、特徴的なこと（食べ物、乗り物、子供たちの遊び、生き物など）を紹介するとともに、簡単な言葉を話す保護者の動画を視聴して、それをまねて話す機会をつくっている。修了式ではこれまでの誕生会で親しんだ各国の「ありがとう」の言葉で子供たちが感謝の気持ちを伝えた。

港区には共通のNT教育計画があり、実践教材として歌唱教材では《ハローハロー》《ベイビーシャーク》《あたまかたひざポン》《幸せなら手をたたこう》《ロンドン橋落ちた》《セブンスステップス》など、ゲーム教材としては「だるまさん」「英語でフルーツバスケット」など、クイズでは「色あて」「果物あて」など、これまで実践してきている。

★多様な互いの文化を知る

季節の行事（こいのぼり、七夕飾り作り、行事にまつわる食など）や地域の方から教えていただくお茶会、味噌作りの機会をつくっている。地域においては、町内会のお祭りに子供たちが参加して山車を曳いたり、年末に餅つきをしたり、地域全体で子供を見守っている。

④ 園運営上の必要となること（園長の役割を含む）

- ・ それぞれの立場で豊かに生活するための共通理解をもち園全体で推進することを大切にしている。「多様性」を「一人一人を大切にする」という観点で捉え、日々の生活の中で、言葉や振る舞いに注意を払うことを大切にする。また、外国につながる子供と日本人の子供を区別せず、基本的に同じ言葉や遊びで関わる方針を継続する。言語が分からないことで区別せず、伝えたいという気持ちをもって関わる姿から、子供たちにも保育者の考えが伝わるように関わっている。さらに、多様な人々が集うため、園では宗教行事には触れず家庭や地域で経験してもらう。保護者も園内外で交流し、日本の出汁、ロシアのピロシキなどのクッキングを通じた交流も生まれている。
- ・ 保護者がその国の絵本を持ってきて読み聞かせをしたり、インターネットで保育者が探したりしても、国によって情報量に差がある。各国の代表的な絵本や遊びが情報としてまとまっているものがあると活用しやすいので、教材開発が必要である。また、遊びのルールや規範意識など、日本と他国との文化の違いを子供にどうやって説明していくか難しさがあるので、単語や絵表示や具体物等の視覚的教材を用いてコミュニケーションを補助している。
- ・ 園だよりや入園手続きなどは、事務で日本語と英語を併記して発行し、多言語対応をしている。文化や言語によるルールの違い等は丁寧に説明し、保護者と連携して理解を深める。そのため、園内の掲示等の子供の名前の表記については、入園時に保護者に決めてもらう。カタカナ、ひらがな、英語、それらのミックスなど、家族にとって分かりやすさを優先している。

⑤ 子供が経験し学んでいること

言葉が分からなくても、伝えようとする思いをもって関わり合ったり、新しいことを知ろうとしたりする意欲をもつ。例えば、国旗の絵本を探す5歳児から、「世界とつながりたい」といった発言も見られたている。言葉が通じなくても、動きを伴う歌などを通して、歌えなくても動きで楽しさを味わったり、自然を発見した時の喜びや驚きなど共通の興味を通じて自然に交流できたりしている。一緒に自然について感動した経験をする、関係が近くなり、年齢を越えて互いを親しみのもてる存在として認識するようになる。

荒川区立日暮里幼稚園(東京都)

「園や地域の実態に応じた元保護者の人材活用」

キーワード：外国籍の方が多く住む地域(a)、外国籍の元保護者(b・d)、
違いを排除しない(f)

① 園の特色・地域の実態

【園の規模】3歳児、4歳児、5歳児のクラスで構成され、園児数は80名

そのうち、外国籍の子供・日本語を話せない帰国子女の在籍数は15名

(2025年12月1日現在)

【教育目標】「げんきで なかよく かしこい子ども」

【園の特色・地域の実態】東京都荒川区の南部に位置する公立幼稚園である。地域にアジア系の方が多く住んでいる。地域柄、外国籍の子供が多く入園し、途中入園も多い。地域や園に「違いを排除しない」という考えがある。

② 「カリキュラムとの関連」又は「活動の背景」

『英語であそぼう』は、子供たちが日本とは違う文化や言葉などを身近に感じ、興味や関心をもてるようにすることをねらいに、平成4年より学校パワーアップ事業に追加した活動である。

＜ねらい＞・友達と一緒に歌ったり、身体を動かしたりすることを楽しむ。

・外国の言葉や文化に触れ、興味をもったり親しんだりする。

＜内 容＞・英語を使つての手遊びや歌、ゲーム、絵本の読み聞かせなどの活動に参加する。

＜対 象＞・3歳児～5歳児、各学年20分。学期に1回、年間3回実施

③ 活動の展開 5歳児

★2学期(第2回)の「英語で遊ぼう」の様子

講師は、英語の絵本や絵カードなど、視覚的な教材を使って、子供たちの興味が向くようにしながら活動を進めていた。カラフルで美しいイラストが使われていることもあり、子供たちは、「大好き!」「それ、知ってるよ。」などとつぶやきながら、教材に見入っていた。

特に、『ケイティ』というパペット人形とはやりとりがしやすいようで、「こっち来て!」と声を掛けたり、「あくしゅ!」と触れることをせがんだりしていた。日頃は恥ずかしさや緊張から消極的な子供も、『ケイティ』を通しての声掛けには、「ハロー」「グッバイ」などど、自分から答えている姿が見られた。

『英語であそぼう』の時間に対して、どの学級も抵抗感のある子供たちが少ない。『英語であそぼう』の時間を楽しみにしている子供が多く、「英語、知ってるもん。」と教師に得意げに話したり、「アップル」「キャット」など、友達同士で知ってる言葉を伝え合ったりする姿があった。

外国籍の子供たちは、母国語以外に多少の英語を知っていることが多いため、ネイティブの先生からの英語での声掛けに嬉しそうに答えていた。

★「英語で遊ぼう」実施後の遊びや生活での様子

外国籍や帰国子女の子供たちと関わる際、『英語であそぼう』の講師が自己紹介で使っていた自分の名前を伝える表現を思い出し、「マイネームイズ〇〇」という表現に自分の名前を当てはめて、相手の顔を覗き込みながら自分の名前を伝えようとしていた。

転入園児や新入園児の園見学などで、園内で初めて出会う子供に対し、「今度、新しく幼稚園に来るの?」「お名前は?」「何歳?」などと声を掛けて、相手からの答えや反応がない場合、「ハロー」と簡単な挨拶の言葉を掛けて様子を見る姿があった。

個々で英語を学んでいる子供はいるが、『英語であそぼう』の時間という形で学級の子供たち全員で共通の経験をできることが、英語を身近に感じ、自分も使ってみようという自然な流れにつながっていている。園生活や遊びの中で英語に関係する出来事に出会うと、「英語でやったよね」「知ってるもんね」などと友達同士で嬉しそうに顔を見合わせたり、話したりしている。

友達や教師と一緒に色鬼遊びをする際、『英語であそぼう』の活動で楽しんだ『色カード遊び』を思い出し、「レッド」「ブルー」などと英語の色表現を使っている子供がいた。

④ 園運営上の必要となること（園長の役割を含む）

- ・ 「英語で遊ぼう」は、英語を習うのではなく、みんなで英語に触れ楽しむことを大切にしている。
- ・ 園長をはじめ教員も英語は話せないが、何とか自分の思いを相手に伝えようとしていくことが、人との関わりに対する子供たちの刺激・モデルになっている。
- ・ 教員が講師と子供のやりとりを見ることが、子供たちの自己発揮・自己表現の新たな一面を知る機会になる。(幼児理解)
- ・ 保護者同士をつなげることを心掛けている。外国籍の保護者は、同じ国の人が分かると安心する。外国語が話せる人を紹介することで、普段から保護者同士が気に掛け声を掛け合う関係になっていく。(子育て支援)

⑤ 子供が経験していること

言葉は日本語だけではない、他にも言葉があることを感じている。学んでいるのではなく感じている。そして、いろいろな人と関わる機会をもつことが、これからの人への信頼関係、自己発揮の基盤となる。『英語であそぼう』の時間に、自分の英語で実際に講師とやりとりができたことも自信となっている。このような外国語に触れる機会は、外国語を学ぶ教室や外国語の個別指導とは違って、子供たちの生活や遊び、友達との関わりに密接につながっており、これから子供たちが成長していく上での大きな基盤となっていくものだと感じている。

学校法人安見学園 板橋富士見幼稚園(東京都)

「カリキュラムと連動したICTを使った多文化を楽しむ新たな取り組み」

キーワード：カリキュラム(f)、外国の幼稚園とのリアルタイム交流(f)、ICT(f)

① 園の特色・地域の実態

【園の規模】園児数は130名 そのうち、外国にルーツのある子供の在園数は5名

【幼児教育に対する理念と精神】多様性に富んだグローバル社会に向けた豊かな人の育成を目指し、次の理念と精神の下に幼児教育を行います。

○板橋富士見幼稚園の全ての教職員は、一人一人の幼児を保護し最善の利益を保障する保育を行うと共に、教師と保護者が常に一体となって豊かな人間観の育成に寄与します。そのために教職員が一体となって、以下の理念に基づき教育を行います。

私たちは、

- ・子どもを大事にする保育を目指します。
- ・家庭を大事にする保育を目指します。
- ・奉職の精神をもって保育に専念します。
- ・一人一人に繊細な心が宿る保育を目指します。

【園の特色】板橋区の住宅街にある幼稚園である。教育には「個人の可能性を伸ばすこと」と「集団の中で社会への適応力を学ぶこと」の2つが重要である。幼稚園教育では、自然の中での主体的・自発的な遊びを通して、子供が考え、工夫し、問題を解決しながら学ぶことを大切にしている。板橋富士見幼稚園では、豊かな自然の中で生命の不思議さにふれ、好奇心や探求心を育て、それを学びへとつなげている。その体験から「自信」を育み、集団生活を通じて社会への適応力も身につけていくことを目指している。早期教育よりも、自ら学ぶ力を重視している。短期帰国 海外出張等、外国籍の子供の受け入れも随時行っている。

【実践の紹介】国際幼児教育リサーチセンターを開設し、州立ハワイ大学附属幼稚園の保育について情報を共有しながら、多文化教育に取り組んでいる。国内外の多文化教育をカリキュラムに基づいて実践し、幼児期からの国際理解に向けて取り組んでいる。

② 活動の背景

★国際幼児教育リサーチセンター開設（令和5年4月1日開設）

近年、日本の幼児教育は国内外の社会情勢の変化に伴い大きく変わろうとしている。板橋富士見幼稚園は、この10年間で外国籍の幼児をはじめ多文化的背景をもつ幼児を多く受け入れてきた。様々な国の生活・言語・文化を紹介する中で、多文化教育について今後も模索していく必要がある。

日本固有の教育を大切にしつつ、多文化教育を通して一人一人の子供が自分たちの文化を認め合い、誇りに思える保育を展開し、質の保証に向けた幼児教育を実現するため、国際幼児教育リサーチセンターを設置することとした。諸外国との幼児教育ネットワークを活用し、国際教育研修や諸外国の幼児教育者との交流を通じて多くの情報を共有し、本園の教育に寄与することを目的とする。

現在、日本の幼児教育に関する世界情報はOECDが発信するデータに基づくことが多く、教育者の視察による情報は限られている。開設の初期段階として、アメリカ合衆国と日本との幼児

教育交流を柱とし、日本語を習得中の園児にとって速やかな習得を可能にする道を拓き、多文化に対応した幼児教育を進めていく。現在、その橋渡しとして国際幼児教育リサーチセンターのA先生が、サンフランシスコ州立大学附属幼稚園および勤務先である州立ハワイ大学附属幼稚園の保育について情報を共有しながら、多文化教育に取り組んでいる。

③ 活動の展開 5歳児

★教育課程に位置付けられた保育の展開

板橋富士見幼稚園幼児期の国際理解教育課程

幼児期からの国際理解の必要性の根拠	
「国内外の多文化教育」	
◆幼稚園教育要領	
第1章領域 環境の内容	
(6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。	
◆解説	幼児が、日常生活の中で我が国や地域社会における様々な文化や伝統に触れ、長い歴史の中で育んできた文化や伝統の豊かさに気付くことは大切なことである。 このため、例えば、教師と一緒に飾りを作りながら七夕の由来を聞くなどして、次第にそのいわれやそこにこめられている人々の願いなどにも興味や関心をもつことができるようになることが大切である。 また、幼稚園においては、例えば地域の祭りに合わせて、地域の人が幼稚園で太鼓のたたき方を見せてくれる機会をつくるなど、地域の人々との関わりを通して、自分たちの住む地域に親しみを感じたりすることが大切である。なお、身近な地域社会の文化や伝統に触れる際には、異なる文化にも触れるようにすることで、より豊かな体験をしていくことも考えられる。さらに、幼稚園生活で親しんだ伝統的な遊びを家族や地域の人々と一緒に楽しむことなどにより幼児が豊かな体験をすることも大切である。
(12) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ	
◆解説	幼児期においては、幼稚園や地域の行事などに参加したりする中で、日本の国旗に接し、自然に親しみをもつようにし、将来の国民としての情操や意識の芽生えを培うことが大切である。幼稚園においては、国旗が掲揚されている運動会に参加したり、自分で国旗を作ったりして、日常生活の中で国旗に接するいろいろな機会をもたせることにより、自然に日本の国旗に親しみを感じるようにさせることが大切である。また、そのようなことから、国際理解の芽生えを培うことも大切である。としている。

「国内外の多文化教育」 教育課程

板橋富士見幼稚園

	前 期					後 期					
	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ねらい	◎ 自分の生まれ、ルーツに触れ、家族のあることに気づく。 ◎ 自分の町の楽しさを知る。 ◎ いろいろな国のあることに気づく。 ◎ いろいろな言語のあることに気づく。 ◎ 言葉の違う言葉に興味や感心を持つ。 ◎ 言葉の違う国の生活について先生や友達と語り合う。					◎ 生まれた国の国旗や生活などに親しみをもつ。 ◎ 外国にある幼稚園と直接語り合い身近な存在に気づく。 ◎ 生活や文化の違いに親しみをもち、この違いに関心を持つ。 ◎ 日本以外に様々な国のあることに気づき、憧れをもつ。 ◎ 自分の住んでいる国や世界の国の生活に関心をもつ。 ◎ 多言語に興味をもって、使ってみたり、多言語の映像を楽しんでみたりする。					
環境構成	・クラスの中の日本語の話せない子どもも、他児と仲良く遊べるよう、教師は 翻訳機 などを使って、言葉の壁を取り除く。 ・言葉の違いを丁寧に説明し、友達としての意識が強く持てるようにする。在籍児の母国の 絵本や動画 など、視覚を通して興味関心を向けていく。 ・海外の生活や文化（習慣や祭りなど）を、 ICTを活用 し多文化を知り楽しめるようにする。 ・外国籍の 保護者 から自国の生活文化について話してもらう。					・異なる言語と日本語が混在する幼児には、教師が介在し、遊びを広げていけるようにする。その際、 <u>互いの表情やジェスチャー、言葉のイントネーションなどを受け止めながら、互いの心が繋がるように支援</u> していく（子ども同士と教師）。 ・インターネットを活用し、諸外国の幼稚園とビデオレターなどや二元中継を介して、互いの国の幼稚園での遊びや生活の様子、近隣の生活などに興味をもって楽しめるようにしていく。国際幼児教育リサーチセンターを介して、交流を深め合う。					
内 容	・それぞれの遊びを通して、教師と共に言葉の壁を超えて、互いに仲良く遊ぼうとする。 ・地球儀や地図などを使って、自国のあること知る。 ・それぞれの国によって言葉が異なり、様々な違いの面白さに気づく。 ・外国の絵本や生活などを積極的に知りたいと思うようになる。					【内外の生活文化に親しむ】 ・食（食べ物）文化（くらし）・気候・領土・国旗・生活様式・植物・動物・学校・絵本・交通（乗り物）・花・樹木・楽器・祭り・伝統などに親しむ。 ・ビデオレターや二元中継を通して、外国の生活や文化を学ぶ合う。					
予想される取り組み	・他国の家や乗り物、食べ物、洋服、遊びなどの違いを楽しみ、自分たちの国の生活と比べてみる。 ・言葉が通じず、遊びが途切れたり、生活の仕方の違いを注意したりする中で、日本の生活習慣を確認したり、学び合ったりする。時には、その時々に出てくる言葉を翻訳し、言葉の面白さに気づく。 ・他国の生活に必要な道具や衣服などの生活様式などに興味を持って知ろうとし、絵を描いたり、仲間に伝え合うために発表し合ったりする。					・運動会に向けての万国旗作り等を通して、地球儀などを使い日本の国や友達を知る、様々な暮らしについて語り合う姿が見られるようになる。 ・それぞれの国に国旗や国歌がある事を知り、関心を持って国旗を見たり、国歌を先生と一緒に聞いたり、歌ったりする姿が見られる。 ・海外の幼稚園と交流するために、ビデオレターを作成したり、お手紙を書いたりしながら、多文化を学ぶ気持が高まってくる。 ・アメリカハワイ州等の幼稚園とビデオ通話（ZOOM等）等に参加し、子ども同士が、相手の国の知りたいことを質問し合ったり、歌を歌い合ったりして、楽しむ姿が見られる。 ・様々な国の人と交流することで、日本のお祭りや文化等の違いについて、先生や友達と一緒に語り合ったり、保護者等からも多文化交流の大切さを伝えてくる事が多くなる。					

★リアルタイムの園児交流：ハワイの幼稚園の子供たちと心で握手

＜ねらい＞ビデオレターやオンラインでリアルタイム交流を通して、互いの園生活を知り興味や関心を深める。

＜内 容＞・ハワイの幼稚園の生活や暮らしを知る。

・自分なりに感じたり考えたりしたところを表現する。

・よその国を知ることの楽しさを感じる。

＜展 開＞

事前にビデオレターを交換して、園生活や取り巻く環境について興味をもてるようにしておく。当日は、5歳児45名が集まりオンラインの映像を見ながらハワイの子供たちとリアルタイムで交流をする。12月19日10時30分から、リアルタイムでつながった瞬間、富士見の子供たちは大興奮で、ハワイの挨拶「アロハ、アロハ～」と連発していた。「ちょっと落ち着いて」と促されながら交流会が始まった。互いに質問し合ったり歌を歌ったりと、30分という短い時間だったが、とても自然な形で園生活の違いについて語り合うことができた。何よりも印象的だったことは、ハワイの子供たちから「ドラえもんの歌は知っていますか？」と聞かれて、子供たちが「知っているよ」と自然にみんなで歌い始めたことだった。また、ハワイでは神聖楽器として扱われている「イプ」（大きなひょうたん）を見せてもらい、昨年本園で採れた「ひょうたん」を見せると、ハワイの子供たちも「ひょうたん」と繰り返し言っていた。月に一度程のペースで今後も交流会を開催することを知らせると、遊びの中で、メッセージカードを書く子供たちもいた。



「ひょうたん」



「日本語はしゃべれるんですか。」



「アロハー またね！」



ハワイのお友達に、カードを作る

★ネイティブティーチャーとの楽しい時間:共に過ごす環境づくり

地球にはたくさんの国があり、言葉や文化や肌の色の違うたくさんの人々が生活していることを身近な存在として知り、触れ合い、楽しむ環境づくりを目指す。毎週、ネイティブティーチャーとの楽しい英語遊びの時間がある。



④ 運営上の必要となること（園長の役割を含む）

- ・ ハワイ大学マノア附属幼稚園の見学では、園全体が温かい雰囲気に入れられ、その中に子供たちの興味を刺激する工夫された環境が随所に見られた。特に壁面の Sensory Wall や Music Center が印象的で、「いつでも好きな時に」感覚を確かめたり音を奏でたりできる環境づくりは、自園でも取り入れたいと感じた。
- ・ マノア附属幼稚園の先生方が説明の際に「私たちの園は」ではなく「私たちの文化としてこれを大切にしています」と語っていたことが心に残った。伝統行事のような分かりやすい“日本文化”だけでなく、掃除や当番活動、靴の履き替え、全学年での活動など、日々の生活そのものも文化であることに改めて気付かされた。こうした生活文化を次世代に伝えることも重要な教育だと感じた。
- ・ 園では「多様性に富んだグローバル社会に向けた豊かな人の育成」を掲げ、個の可能性を伸ばすことと集団の中で社会性を育むことの両立を重視し、教育課程に位置付けて取組を進めている。さらに、センターでは、日本の教育文化を大切にしつつ多様な文化を認め合う保育を創造している。センターのA先生が海外の大学や附属園との橋渡し役を担っていることも、その実践を支える大きな力となっている。
- ・ 質の高い教育実践を支えているのが、「保育者の海外研修」に見られる保育者の資質向上への継続的な取組である。ハワイ大学附属幼稚園の視察報告から得た具体的な環境構成のアイデアを自園に取り入れようとする姿勢は、質の高い保育を生み出す好循環につながっている。

⑤ 子供が経験し学んでいること

オンラインによる園児交流は、ICTを情報伝達にとどめず、互いの園生活や異文化への興味を自然に広げる効果的な取り組みとして機能していた。ビデオレターからリアルタイム交流へと段階的に進めたことも、子供の関心を高める上で有効であった。交流の中で共通の話題を楽しんだり、歌を通してつながったりする経験は、子供たちが世界に目を向け、多様性を受け入れる基盤を育てている。また、国際性を特別な行事ではなく日常の保育に組み込むことで、英語遊びを通して多様な文化や人々を身近に感じられる環境が整っていることが子供の経験につながっている。

江戸川区立船堀幼稚園(東京都)

「我が子が卒園後も保護者が長年に渡り交流する」

キーワード：外国籍の元保護者(b)、定期的に長期にわたる交流(c)、興味を広げる(a)

① 園の特色・地域の実態

【園の規模】4歳児、5歳児のクラスで構成され、園児数は57名

そのうち、外国にルーツのある子供の在籍数は12名（2025年12月1日現在）

【教育目標】

・元気な子ども ・明るい子ども ・考える子ども ・思いやりのある子ども

【教育目標を達成するための基本方針】

- ・足育(あしいく)…健康な体を育てる。
- ・心育(ここいく)…健康な心を育てる。 ※「英語で遊ぼう」は、心育に含まれる。
- ・遊育(あそいく)…遊びで豊かな学びを育てる。
- ・食育(しょくいく)…食で五感や意欲を育てる。
- ・共育(ともいく)…幼稚園・家庭・地域で育てる。

【園の特色・地域の実態】江戸川区立唯一の公立幼稚園で、江戸川区中心地の住宅街にある。創立59年を迎え、地域の幼稚園として区内全域から子供たちが通園している。

【実践の紹介】「英語で遊ぼう」は年3回の活動である。講師は英語のみ話し、英語の歌を歌ったり、歌に合わせて体を動かしたりとアクティブな活動を大切にしている。手作りの絵カードを使ったゲームでは、身近な題材を取り上げ、回によって内容を変えながら、子供たちが英語に触れる楽しさを味わえるようにしている。インド・中国・モンゴル・インドネシア・フィリピン・アメリカと広域にわたり、英語圏の子供は少ない。

② カリキュラムとの関連

【平成7年度教育課程】 ※区教育委員会に提出

指導の重点の(5)幼稚園2020レガシー

「英語で遊ぼう」などで、外国語に親しむ機会を設けたり、世界地図や地球儀などを見たりする環境を整え、世界の様々な国、言語、文化に興味や関心がもてるようにする。

2003年に中学校でALTが始まったのを受け、幼稚園にも中学校のALTに来てもらい英語に触れる機会をつくろうと考えた。しかしその内容は「英語を教える活動」であり、子供にとって楽しい活動ではなかった。そこで、当時、5歳児クラスに入園してきた子供の保護者(父親がガーナ出身)に、子供たちが英語に親しむ活動の講師をお願いした。我が子が卒園した後も続き、現在22年目になる。

○活動内容

＜ねらい＞ 外国の方との触れ合いを楽しみながら、英語や英会話に親しみをもつ。

＜場 所＞ ホール

＜対 象＞ 5歳児 30分

<内 容>

○年間計画 年間3回実施

月 日	活 動 内 容	教材・準備
5月26日	・英語の歌に触れる・歌う。 ・英語の歌に合わせて体を動かす。 ・英語でジャンケンをする。	・ホワイトボード ・CD ・CDプレイヤー ・幼児用イス
12月15日	・英語の歌を歌う。 ・英語の歌に合わせて体を動かす。 ・野菜や果物の絵カードを見て英語を言う。 ・チームに分かれて、講師が出したクイズの解答の絵カードを取り合う。	・ホワイトボード ・CD ・CDプレイヤー ・絵カード(野菜・果物) ・幼児用イス
2月〇日	・英語の歌を歌う。 ・英語の歌に合わせて体を動かす。 ・形と色の絵カードを見て、英語を言う。 ・チームに分かれて、講師が出したクイズの解答の絵カードを取り合う。	・ホワイトボード ・CD ・CDプレイヤー ・絵カード(形と色) ・幼児用イス

○年3回の内容の考え方

1回目…英語の歌を歌う。分かりやすい歌に触れ、記憶に残るようにする。歌に合わせて体を動かして遊ぶ。

2回目…1回目の復習として、歌と歌に合わせて体を動かす。英語の単語を伝える絵カードは、子供たちの生活の身近にあるものがよいと考え「野菜や果物」にする。帰宅して保護者と買い物する時に会話するきっかけになる。

3回目…1、2回目の復習として、歌と歌に合わせて体を動かす。英語の単語を伝える絵カードは、3回目として少し複雑にした方が面白いと考え、「形と色」にする。

③ 活動の展開 5歳児 ★12月15日の活動

時間	活動の流れ	講師と子供の姿
10:30	○歌 ・Hallo (歌) ○歌と踊り ・Head・Shoulder・Knee and Toes ・If You're happy and … ○絵カードを使って単語を話す。 ○チーム対抗の絵カード取りゲームをする。	○子供たちは半円形になって着席し、英語で挨拶をする。 ・前回歌ったハローソングを思い出す。 ○講師が頭や肩、目や口などをゆっくり触りながら、その部位の英語を話す。 ・子供たちは講師をまねて部位を英語で答える。次に音楽に合わせて歌いながらその部位を触る。 ○講師が英語でクラップ（拍手）、シャウトOK（OKと言う）と話す。講師をまねて子供たちが拍手をしたり「OK!」と言ったりする。次に音楽に合わせて拍手や足踏み、「OK!」と言う。 ○A3の大きさの絵カードに幼児が知っている野菜や果物の絵が描いてある。『ブロッコリー』『トマト』『バナナ』など発音が同じで分かりやすいカードや『リーク』『オニオン』など日本語と発音が異なり難しいカードもある。 ○5～6人ずつチームに分かれる。3チームで対戦する。ラインに一人ずつ並び、少し離れたところに並べたカードを並べる。

11:30	○終わり ・Good-Bye to you (歌)	○講師の話した英語のカードを聞いて走って取りに行く。 取ったら自分のチームのカードになり、一番多くカード を取ったチームの勝ちになる。 同時にカードを取った時には英語でジャンケンをする。 (ロック・シーザー・ペイパー) ○保育室に戻る時、担任に「先生、食事の後、紙に絵描い て、あのゲームやりたい」と言う。
-------	---------------------------------	---

<保育者の気付きと援助>

- ・ 前回の活動を思い出し、すぐに自分の動きを出して楽しんでいる。緊張していた子供も歌いながら動いたり、知っている英語を聞いたりして安心して取り組んでいる。
- ・ 講師の先生の言葉が聞き取れない子供には小声でもう一度英語を繰り返したり、日本語で伝えたりして少しずつ理解できるようにする。
- ・ 絵カード取りゲームでは、子供が落ち着いて取り組み、力の差が出ないようにあらかじめチーム分けをする。

<講師の活動に対する思い>

- ・ 自分はもともと英語を教えており、教員の経験もあった。母親(日本人)はこの活動を受けるに当たり子供たち向けの英語教材などの勉強もした。
- ・ 活動内容は、様々な試行錯誤をし、子供たちの反応を見てシンプルが一番よいと感じている。難しいことや複雑な内容にすると、子供たちは混乱し楽しめない。
- ・ 初心者の子供たちには、聞くよりも目にする方が分かりやすい。手元にある英語の教材を参考にしつつ、子供たちがシンプルに楽しめるように歌を選曲したり絵カードの絵を描いたりして教材を作っている。
- ・ この活動は、勉強ではなく「言語の経験」と考えている。言語は、人と触れ合うためのコミュニケーションツールであり、知識として覚えるものではなく、経験するものである。「英語」そのものというより、「世界」に興味をもってほしい。この活動がそのきっかけになるとうれしい。
- ・ 以前に比べ、失敗を恐れる子供が増えている。「間違ってもいいよ」ということを伝えたい。

★その後の活動の姿

子供の姿	子供が経験し学んでいること
○午後、Y児が白い紙にリンゴやブドウ、ブロッコリーなどの絵をマジックで描く。近くにいたS児、R児もY児に「一緒にやりたい」と言いカードを作る。 ○英語の下にはA,Bなど知っているアルファベットや平仮名(すとりべりー)で書く。 ○保育室にカードを並べる。Y児が講師役になり「ブロッコリー」「ストロベリー」と言うとS児、R児がスタートし、カードを取る。 ○Y児以外の幼児が描いた絵があると、英語が分からないY児は、担任に「スイカって何？」と聞き、教えてもらいながら遊びに取り組む。	○絵カードのゲームは楽しかったからもう一度やりたい思いがある。 ○自分の知っている野菜や果物の絵を描きたい。「カードの下には英語が書いてあったけど、分からないから知っている文字(アルファベット)を書こう」と考える。 ○自分の知っている野菜や果物の英語の名称を知る楽しさを感じる。 ○友達が自分の考えた遊びで一緒に遊ぶ楽しさを感じる。

<保育者の気付きや援助>

- ・ 子供たちが「英語で遊ぼう」で経験した動きを、再現できるスペースやスタートの目印用フープなどの確保、カードの絵を描ける製作材料の用意など環境を整える。
- ・ 楽しかった経験を自分なりに工夫したY児の発想力を認め、楽しさを共感する。

④ 園運営上の必要となること(園長の役割を含む)

- ・ 「英語で遊ぼう」の活動は、【教育目標を達成するための基本方針】の心育(ここいく…健康な心を育てる)に含まれる活動である。子供たちが時期・発達に合った環境・文化に関わることを大切にしている。
- ・ 「英語で遊ぼう」は、英語を「学ぶ」ことではなく、英語で「遊ぶ」ことを大切にしている。
- ・ 「いろいろな人がいていい」ということを感じてほしい。
- ・ 外国にルーツのある子供だけでなく、配慮を必要とする子供、いろいろな考えをもつ保護者がいる。自分と違う考えがある。だからこそ、「まず聞いてみよう・見てみよう・受け入れてみよう。そこから始まる」と考えている。
- ・ 何事も失敗を恐れず、興味をもち挑戦してほしい。

⑤ 子供が経験し学んでいること

英語という言語で遊ぶのは楽しい、外国の方と触れ合うことは楽しいと感じている。このような経験を通して、様々な文化を知り・気付き・受け入れる機会になる。また、友達との関わりが広がり、友達のよさに気付く機会にもなる。

国立大学法人金沢大学 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園(石川県)

「小学校と連携した外国籍の子供の支援」

キーワード：遊びを通じた言語習得（a）、幼小連携（f）、関係者との連携（d）

① 園の特色・地域の実態

【園の規模】満3歳児、3歳児、4歳児、5歳児のクラスで編成され、園児数は78名

そのうち外国籍の子どもの在籍数は6名（2025年12月1日現在）

【教育目標】一人一人の幼児が自分なりの力を発揮し、友達とかかわり合いながら生きる力をやしなう

【園の特色・地域の実態】国立大学附属幼稚園で、幼児教育の理論研究や教育実習の拠点である。特色として、毎年入園する外国籍児への支援に注力している。言語や習慣の違いによる不安を解消するため、附属小学校の日本語適応教室「さくら」と連携し、幼小一貫の体制で多文化共生の教育を実践している。

【実践の紹介】金沢大学附属小学校の日本語適応教室「さくら」と連携し、外国籍の子供を支援している。週1回の通級や個別支援を通じ、遊びの中で自然な日本語習得を促すとともに、大学や保護者とも協働して多文化共生の環境を整えている。

② 「カリキュラムとの関連」又は「活動の背景」

大学附属の拠点として、幼児教育の理論研究と実践的検証を推進している。近年、外国籍の子供の増加に伴う不安解消が課題となり、日常の遊びを基盤とした教育課程を編成した。遊びの中で自然な語彙定着を図るとともに、小学校「さくら」との連携を柱に、園内支援と通級を併用して就学までを一体的に支援している。

③ 活動の展開

★日常の保育活動における取組

本園では、日本語が未定着の外国籍の子供に対し、日常生活の遊びや活動を通じて自然に言語習得を促す環境を整えている。特別な授業形式はとらず、例えば製作活動での折り紙や色塗りを通じて「色」や「形」の語彙定着を図ったり、絵本の読み聞かせに「なぞり書き」を組み合わせる視覚的・身体的に支援したりするなど、子供の興味に合わせたアプローチを重視している。

集団での一斉活動が困難な場合には、空き保育室で非常勤の教員による個別支援を行い、子供が自分のペースで安心して学べる場を確保している。また、毎朝の職員打ち合わせで「気になる子」への対応を共有し、園全体で支援方針を確認することで、担任一人に依存しない組織的な支援体制を構築している。遊びの場面では、子供同士の関係をつなぐ適切な声掛けを行い、社会的な関わりの中で言葉を学ぶ実践を積み重ねている。

★小学校「さくら」との連携による支援

金沢大学附属小学校の日本語適応教室「さくら」との連携は、本園の支援体制を補完する重要な役割を果たしている。対象児は週1回「さくら」に通級し、折り紙や色塗りなどの

製作活動を通じて日本語習得を促進した。これにより「おはよう」「嫌だ」といった基本的な言語表現が可能となり、意思表示の向上が確認されている。

また、「さくら」の日本語指導資格を有する教員が幼稚園に来園し、子供の様子を観察した上で助言を行うなど、園と小学校間で柔軟な連携が図られている。園内での個別支援と通級支援を併用することで、子供の安心感を高め、言語習得を加速させる効果が得られている。特に、園内外で一貫した支援を行うことにより、子供が「言葉で伝える経験」を積み重ね、就学移行に向けた基盤を形成することにつながっている。

★関係機関及び関係者との連携による支援

家庭や大学との連携も重要な柱となっている。大学教員による翻訳支援により、保護者向けのお便りが英訳され、家庭との円滑なコミュニケーションが可能となった。また、英語が話せる保護者が外国籍家庭を支援するなど保護者集団による協力体制も整備された。

家庭内では父親が日本語の学習を積極的に支援し、母親も園との関わりを深めることで、子供の安心感と情緒の安定につながっている。さらに、地域資源を活用した交流活動や大学との協働により、多文化共生の環境が整備されている。

④ 園運営上の必要となること（園長の役割を含む）

- ・ 園長は、園の教育目標を維持しつつ職員と共有し、日々の保育に根付かせる役割を担っている。また、毎朝の打ち合わせを通じて支援方針を確認し、担任に依存しないチーム体制を整えることで、一貫した支援を実現している。
- ・ 小学校「さくら」との通級支援を調整し、園内外での連携を推進するとともに、大学や保護者との協働を調整し、家庭との関係を強化している。加えて、教職員の研修や情報共有体制を整備し、人材不足を補いながら多文化対応力を高めることも園長の重要な役割である。このように園長は、教育方針の維持、支援体制の構築、連携の推進、人材育成を総合的に担い、外国籍児童を含む多様な子供が安心して園生活を送れる環境を整えている。

⑤ 子供が経験し学んでいること

子供たちは、遊びや活動を通じて自然に日本語を習得し、友達との関わりの中で社会的な関係を形成している。例えば、折り紙や色塗りなどの活動を通じて言葉を獲得し、「おはよう」「嫌だ」といった基本的な表現が可能となった。また、友達と基地づくりやごっこ遊びを行う中で、言葉を交わしながら協力する経験を積み、社会性と自己表現力を育んでいる。さらに、教員や友達に理解される安心感を得ることで情緒が安定し、園生活に主体的に参加する姿が見られるようになり、言語習得と社会的成長の成果が確認されている。このように、子供たちは日常の遊びや人との関わりを通じて、言語表現・社会性・安心感を獲得し、就学移行に向けた基盤を形成している。

静岡市立登呂こども園(静岡県)

「国は違っても子育てに悩みをもつのは一緒」

キーワード：外国籍保護者のための「とろフレンズ」(d)、子育ての悩みを共有(f)、
「海のない国」への関心(a)

① 園の特色・地域の実態

【園の規模】0歳児から5歳児のクラスで構成され、園児数は140名 職員数59名

そのうち、外国籍の子供の在籍数は10名（2025年12月1日現在）

【教育・保育目標】「心豊かで たくましい子」

静岡市が目指す「たくましくしなやかな子供たち」の育成に向け、教育及び保育に取り組んでいる。

【園の特色・地域の実態】静岡市駿河区の南にあり、団地に囲まれた中心に登呂こども園は存在する。徒歩圏内には登呂遺跡（公園）があり自然豊かな環境に恵まれている。毎年、外国籍の方は全園児の1割ほどを占め、認定こども園の周りの市営住宅に住んでいる方が多い。

【実践の紹介】ネパール、ベトナム、フィリピン、中国（8家庭10名）が在籍をしている。入園する外国籍の子供はほとんどが生まれた時から日本で暮らしているので、言葉の問題は特にない。ただし、外国籍の保護者は、子育てのちょっとした悩みも相談する人がいないので、園として外国籍の保護者を対象に保育者と話し合う場をつくった（2年前）。それを「とろフレンズ」として、一般の保護者の方々にも広げていった。

② 活動の背景

静岡市では外国籍の方の増加に伴い、こども園に通う外国籍の子供も増えている。登呂こども園は他園に比べ、その割合が高い状況にある。園生活の中で、お便りだけでは伝わらないことや習慣の違いから理解できないことを個別に丁寧に説明するなど、日々の支援を行ってきた。しかし子育てや小学校入学に対する不安、園や児童発達支援など子育て支援を受けるための書類作成やシステムの理解の難しさなど様々な問題があることを感じていた。そこで、保護者同士のつながりを深めることで悩みや不安を共有でき、日本での子育てがしやすくなるのではと考え、「とろフレンズ」を計画した。

最初は外国籍の保護者と職員で行った。言葉の壁のような話もあったが、子育ての悩みや子供への願いは、国籍に関わらず同じと感じる部分が多かった。また、思いのほか外国籍の保護者同士のつながり（コミュニティ）があることが分かり、日本の方と関わりたいという希望を知ることができた。様子を園便りで伝え、2回目以降の「とろフレンズ」では、全保護者を対象に参加を呼び掛け行っている。休みの日の過ごし方、お勧めの便利グッズといった子育ての話題や、保護者自身の趣味の話など、毎回時間が足りないほどである。職員も参加し、話題提供をしたり園の様子を伝えたりしている。また、救命救急などの講座も企画したりしている。

③ 活動の展開

「とろフレンズ」が保護者の方に定着しつつある中、次は子供たちにも活動を広げたいと考えた。こども園では、保護者が一日につき数名ずつ順番に園に来て、午前中の半日子供たちと一緒に遊び、園での子供の様子を見てもらう保育参加会を設けている。その中で、年長児に対して外国籍の保護者に話をしてもらう機会を計画すると、保護者（ネパール出身のお母さん）も快く引き受けてくれた。世界地図を用意し、ネパールの場所や国旗、挨拶や言葉、遊びなども教えてもらった。ネパールには海がないという話を聞いて驚く姿もあった。いつも一緒に遊んでいる友達のお母さんなので、子供たちからもたくさん質問していた。



④ 園運営上の必要となること（園長の役割を含む）

- ・ 外国籍の保護者は、日本の生活や子育ての相談に困っているのではないかと思います、外国籍の保護者と職員との交流会をもった。しかし、話題のほとんどが、子育ての悩みだった。国籍関係なく、子育てについては不安をもっているのです、それらのことに配慮して、不自由を感じないようにしてもらうことは意識している。
- ・ 「とろフレンズ」を作り、保護者同士の関係をつくりながら、子育てを楽しめるように配慮している。

⑤ 子供が経験し学んでいること

子供たちが、外国籍の子供たちと過ごすことに戸惑いはない。ただ、ネパール籍の保護者から、運動会で飾る万国旗の中に“「ネパール」国旗がない“という話があり、ネパールの国旗を作って飾った。その際、5歳児に向けて「ネパールの国旗」について形の違いを話題にすると、その他の国の国旗にも関心が広がった。子供たちは、それぞれの国の国旗と国の名前を書いた表で色や形を見比べ、たくさんの国があることを知った。どんな国がどこにあるのか、その大きさや海があるのかないのかなどにも注目していた。新鮮な経験だったようだ。

また、日本語では「おはよう」「こんにちは」のように時間によって使い分ける言葉があるが、ネパールには使い分ける言葉がないことを聞いて驚いていた。

名古屋市立第一幼稚園(愛知県)

「外国籍の子供と日本の子供が互いの言葉に関心をもつ」

キーワード：外国籍の子供(a)、日本の子供双方の言葉への関心(a)、地域の資源の活用(f)

① 園の特色・地域の実態

【園の規模】3歳児、4歳児、5歳児 各2クラスで構成され、総園児数は121名

そのうち、外国籍の子供の在籍数は5名（2025年12月1日現在）

【教育目標】園の教育を通し目指す子供の姿として、以下のことを重視している。

- ・主体的に生活する子ども
- ・友達と親しむ子ども
- ・豊かに表現する子ども
- ・自然とふれあい感動する子ども

【園の特色・地域の実態】名古屋市の官庁街に近い商業施設や高層マンションが立ち並ぶ都会の中にある。創立130年を超える緑豊かな園庭や園の前に広がる芝生の公園等により、都会の中のオアシスのような園でもある。

園に隣接する名古屋市の「グローバル・エデュケーション・センター」では希望する園に英語での楽しい活動を通してグローバルな文化や言語等に触れる機会を提供している。

【実践の紹介】外国籍の子供が、上記のセンターでの「キッズ・イングリッシュ」や学級での活動を通して、自分を表出していくきっかけとなっている。

② 「カリキュラムとの関連」又は「活動の背景」

外国籍の子供の増加により、幼稚園教育要領の内容を踏まえ、翻訳アプリ等を活用しながら、例えば運動会で外国籍の子供の国旗を探して描いたり、世界地図や地球儀を見たりして、日本以外の国や言語、文化に触れることができるようにしている。教職員が多文化を受け入れようとする意識や姿を見せることで、子供自身にも日本と同様に世界にも目が向けられるように働き掛けている。

③ 活動の展開

★グローバル・エデュケーション・センターでの「キッズ・イングリッシュ」

「キッズ・イングリッシュ」とは多国籍の外国籍の講師2名による歌やダンス、レクリエーションを通して、子供が楽しみながら英語に触れる活動である。大型ビジョンの映像を見ながら、講師とジェスチャーを交えた英語での会話を繰り返し、英語の歌に合わせたダンスを通して、講師と一緒にスイングやクラップ(手拍子)をして、体を動かしながら自然と英語の世界に入り込めるプログラムになっている。

9月に入園し、園での会話は翻訳アプリを使っている中国籍のA児が不安そうにしていた。画面の絵と講師の話す英単語が同じと分かると笑顔になり、講師の話す英単語を「sunny!」と大きな声でリピートし喜んで参加していった。次第に身を乗り出し、いつの間にか最前列で歌ったり踊ったりし、最後に今の気分を尋ねられて「Happy!」と元気よく答えていた。他の子供も講師によるジェスチャーと英語のイントネーションが自然に体にしみ込み、リズムに乗って歌ったり踊ったりした。園への帰り道、子供たちは友達と共有した英語の歌や言葉の印象に残った部分を口ずさみ楽しんでいた。ネイティブ講師の明るくタイムリーな関わりに誘われ、英語の楽しさを感じているようだった。

★学級の誕生会での外国籍の子供と日本の子供との触れ合い

子供の誕生日は、学級で誕生児に好きなものを尋ねたり歌を歌ったりしてお祝いをしている。B児の誕生日に保育者は中国籍のA児の隣に座り、翻訳アプリ(以下、アプリ)を使って会の様子を伝え、A児は「ああ」と理解したような表情で頷いた。「あなたも彼に聞きたいことがありますか」とアプリで尋ねると、A児もアプリで「例えば何がありますか」と保育者に聞いてきた。保育者が「好きな色は何ですか」と伝え、A児も少し明るい表情になって大きく頷いた。保育者が「What color do you like?」とB児を指しながらA児に話すと、A児も「What color do you like?」とB児に尋ねた。保育者がB児に伝え「うーん、虹色」と言った。保育者がA児にアプリで「虹色が好きだって」と伝え、A児も頷いた。保育者がA児にも同じことを尋ねると、A児はうれしそうに中国語で「blue and green」と言った。周りの子がそのA児の英単語を聞き取り、「あっ、ブルーだって」と言った。保育者も「A児は青と緑が好きだって」とみんなに伝え、B児は「へえ!」とうれしそうに笑い、他児も「僕たち、英語が上手になってきたね」と答えた。質問が終わり、みんなで『ハッピーバースデー』を歌うとき、保育者がA児に「Let's sing the Happy Birthday song」と伝え、A児は歌のリズムに合わせて手拍子をしたり口を少し動かしたりして一緒に歌い始めた。その後、みんなで「B児お誕生日おめでとう」と祝う際、保育者がA児に「How do you say “Happy Birthday” in Chinese?」と尋ねると、A児は中国語で返事をした。保育者が「“生日快樂 (sheng ri kuai le)” だって」と子供たちに伝え、口々に模倣し、みんなでB児に声をそろえて言った。A児はみんなの中国語を聞くと笑顔でグッドサインをした。保育者が「日本語でも中国語でもお祝いできたね」と言うと、子供たちは「すごい」「僕たち中国語も話せるようになってきたね」と喜んだ。

④ 園運営上の必要となること(園長の役割を含む)

- ・ 「キッズ・イングリッシュ」のようにネイティブならではの講師が醸し出す雰囲気は外国籍の子供の心を躍らせ自己表出につながり、子供たちも互いに母語ではない言語を通して楽しさを共有する体験にもなる。地域の資源としての積極的な活用は必要である。
- ・ 保育者も翻訳アプリを伝達機能として活用するだけでなく、言葉が互いの気持ちをつなぐ重要な意味をもつものであることを意識し、言葉による仲立ちをする必要もある。
- ・ 保育者の専門性を高めるには、外国籍の子供の対応を担当だけに任せず、園の教職員間で共有しチームで関わることを理解し合い連携を図ることを重視する必要がある。

⑤ 子供が経験し学んでいること

コミュニケーションは言葉だけで行われるものではないが、年齢が上がるにつれ、言葉が「分かる、伝わる」うれしさは、気持ちもつながるうれしさとなることを実感し、外国籍の子供を理解しようとする気持ちから外国語への関心も広がる。互いに言葉が違っても、周りの雰囲気や様子から同じような意味であることを感じ取り、互いに新しい言葉として覚えたり使ったりするようになる。外国籍の子供の入園を機に、外国籍の子供も日本の言葉や文化に関心をもち、双方の子供が互いの言葉や文化に対する感覚を豊かにし、育ち合い、学び合う機会となっている。

学校法人光明学園 光明幼稚園(京都府)

「いろいろな国の子供をいつでも受け入れる」

キーワード：デザート文化とおやつの境界線(a)、行事における個別文化の尊重(f)、
外国籍保護者への配慮(d)

① 園の特色・地域の実態

【園の規模】満3歳、3歳児、4歳児、5歳児のクラスで構成され、園児数は98名

そのうち、外国籍の子供の在籍数は5名（2025年12月1日現在）

【教育目標】「自ら考え、自ら感じ、自ら行動できる力を育む」

【園の特色・地域の実態】京都市中京区の住宅街に位置する仏教系私立幼稚園

【実践の紹介】外国籍の子供の受入は制限せず、これまでにアメリカ、中国、台湾、インドネシア、スペイン、UAE（2学期短期）、ドイツ（夏季短期）等の子供が在籍している。外国籍であるという違いを特別視せず、自然に受け入れている。

② 活動の背景

過去に学生ボランティア斡旋による外国籍の教員がいたことはあり、外国籍の教員の存在は面白いとは考える。一方で、それを枠として積極的に採用したりすることはなく、外国語活動なども含めて「固定枠」としては多文化の学びの時間は設けない。在籍する子の様子や個々の子供の関心や必要に応じて、外国語や活動に触れるようにしている。

多文化である事を忌避もしないが、迎合もしない。日本文化や生活の一部として、そして子供たち一人一人の日本での生活を尊重しながら多文化共生を考える。

③ 活動の展開

★デザート文化とおやつの境界線

中国籍の年長児が、転入してきた当初にお弁当のデザートとしてクッキーやチョコを持ってきたことがあった。在園児保護者や保育者は“何となくデザートのイメージ”の共通理解として果物や小さなゼリーを持ってくるのが日常であったため、周囲の子供は「なんで？いいの？いいなー」という反応であった。保育者はその際に「中国ではこれもデザートなのかもしれないね。みんなと違うこともあるんだね。」と言うと、多くの子供は「お弁当のおかずも中国で食べるものが入ってるのかな」と違いに関心が向き、「じゃあ僕もチョコ持ってきたい！」と言う子供も少数いた。園生活に慣れてきた頃、当園でのデザート文化や感覚の違いを保護者に説明したところ、現在はお菓子をデザートにすることはなくなっている。

日本の子供が「違う＝誤り」と捉えがちな場面で、文化差を仮説的に言語化し受容に導く配慮(中国籍の子供のお弁当にデザートではなくおやつがあった時に、「中国のデザートはおやつなのかな」など、日本のやり方と異なる場合に、決して否定から入らない)。を行う対応を、当該保育者だけでなく園の総意として全保育者間で共有した。

★他国の歌や食べ物への関心

英語を母語にしている子供が在籍していた時には、クリスマスシーズンに英語の歌詞を含む歌を子供たちと一緒に歌うことを決めたこともあった。その際、当該児に歌詞の意味を尋ね、クラスみんなに教えてもらう機会を設けたことで、周りの子供たちはその子のルーツの国について知ることができ、外国や異文化に対して興味をもつ姿が見られた。日常の会話の中でも「どんなご飯を食べているの?」「夏休みに帰った時はどこへ行ったの?」など、その子の国や文化について自然に話題にしており、保育者自身も海外旅行が好きなことから、「スペインではここに行ったよ」など、外国を身近に感じられるようなやり取りを普段事として心掛けている。

★行事における個別文化の尊重 5歳児

本園では年長児のお泊り保育として、毎年比叡山延暦寺の会館を利用している。お泊り保育を行事として捉えていたため、その宗教性に着目しておらず、インドネシア国籍でムスリムである母親はお泊り保育説明会時に初めてその行き先を知ることになった。当該保護者とは普段の生活時から、食事の前のお祈りや宗教行事（花まつり等）をどこまで園児本人に求めるかは相談しており、今回も母親と行程等を一緒に確認した。結果として、本堂への仏参の時間のみ別行動として、その時間を保育者との散歩に充てることで合意し、実施された。

本児の体験としての教育性や宗教観の折り合い地点を探し、どちらかの宗教に合わせるのではなく、互いに歩み寄れた（今回のケースの場合、園全体のカリキュラム（お泊まり保育の実施）は継続しつつ、本人の選択と尊重を両立させる調整を園長や保育者と保護者間で合意が取れた）ことで、話し合いが大切な時間であったと考えている。

④ 園運営上の必要となること（園長の役割を含む）

- ・ 教育方針にある「一人一人に向き合う」ことを最優先としている。外国籍・多文化だからと特別なカリキュラムを恒常的に用意するのではなく、必要な支援や子供の関心に応じて保育に取り入れる。保育者も含め、園全体にその風土を構築していく。
- ・ 外国籍の子供の受入時における宗教関連や食事等における個別配慮事項や事前説明などを保護者とも話し合い、適宜調整しながら歩み寄りの地点を探すようにしている。保護者が安心して園生活を送れるよう、例えば配付物の重要な部分が分かりやすくなるようマーカーを引くなど工夫している。
- ・ 日本文化や仏教以外の行事も既存のもの（ハロウィンやクリスマス）含めて特別視するつもりもない。春節やフィーカなど、必要があれば取り入れても構わない。

⑤ 子供が経験し学んでいること

子供たちが、外国籍の子供たちと過ごすことを通して、「違い」を問題視・特別視せず、自然に受け入れることができる。園の「一人一人への配慮は全員に通用する支援」という姿勢が、保育実践を通して子供・保護者双方に浸透し、いじめや排除につながらない土壌を形成することとなっている。

大阪市立常盤幼稚園(大阪府)

「外国籍の幼児の入園を機に、他の国の言葉や文化への関心をもつ」

キーワード：他の国の言葉や文化への関心をもつ(a)、外国籍の保護者への配慮(d)、通訳機の活用(f)

① 園の特色・地域の実態

【園の規模】3歳児、4歳児、5歳児のクラスで構成され、園児数は80名。

そのうち、外国籍の子供の在籍数は8名（2025年12月1日現在）

【教育目標】「明るく たくましく 思いやりのある子供を育てる」

【園の特色・地域の実態】大阪市の天王寺「あべのハルカス」近郊の都市近接の公立幼稚園で、広い園庭と池、畑、季節の果樹など自然体験が豊富にある。保護者（PTA）との連携も活発である。

【実践の紹介】外国籍の子供の在籍により、保護者の生活文化（食・衣）や行事等に関する対応を具体的に行っている。インドネシア人の母親はヒジャブを着用するが、子供は自由であり、子供同士は、自然と関わっており違和感はない。

② 活動の背景

外国籍の子供の保護者は、ほとんど日本語を理解できない。入園希望者は、通訳者を同行し、公立幼稚園である本園の教育方針や内容である遊びを通して学びを深める、環境を通して主体的な活動を目指す、小学校の前倒し教育ではない等を伝えている。その際、園内の環境や遊びの様子を見てもらうことが保護者の理解を促し、「日本の幼稚園で学ばせたい。日本の文化や生活に触れ、日本の教育を受けていきたい」と望んで入園を希望している。通訳者は入園時のみの同行であり、園生活では市から配給の通訳機を活用している。

③ 活動の展開 4歳児・5歳児

★日常の保育活動における取組「これ、Bちゃんの国の旗や（4歳児）」

本園の運動会は保護者が中心となっていく。大阪・関西万博開催である今年度はTOKIWAEXPO 2025」というテーマで親子まつりを開催した。

保護者が様々な国や地域の国旗や世界の建造物を作成する中、日頃からA児はB児（中国からの子供）に関心をもっていたが、何か通じ合えたようにお互いに感じた姿があった。言葉だけでは通じ合うことは難しいが、視覚支援も意識したことで見て分かり合えることもある。子供は、B児との出会いにより、世界地図を見せ、中国語で簡単な挨拶をし、B児や外国への関心が高まった。お祭りは、B児の保護者も参加し「素晴らしい。楽しい」と喜び、幼稚園の行事に期待をもって参加し、母国とは違う教育内容に、驚きながらも楽しんでいる。

A児は「これ、Bちゃんの国の旗や」とつぶやいた。A児が「Bちゃんの中国の旗あるよ」とB児に言う。B児はまだ、日本語が理解できないので返事はなかったが、A児が「これこれ」とB児に国旗を指すと、B児はにっこり笑い、A児もにっこりして笑う。

★通訳機を使った保育活動の工夫「じゃんけん遊び、OK・OK（5歳児）」

本園では、翻訳機を活用した保育活動を行っている。保育者が話し、翻訳機から聞こえる中国語に、D児（中国から途中入園）は「OK、OK」と笑顔で答えている。5歳児になると、何とか伝えたい、分かり合いたいという気持ちが強くなり、日本語以外で知っている言語で伝えようとしたり、翻訳機という手段を保育者に頼んだり、分かり合える手段を5歳児なりに模索する姿がある。

ある日、クラスで音楽にのって二人ずつ出てきて順番にじゃんけんをする遊びをするようになった。子供たちは、D児の様子を見ながら自分の番が来るのを待っている。

C児「Dくん、違う違う。ジャンケンポンで出すねん」

D児「・・・」分からない様子を見せる。しかし、何回もやっているうちにタイミングが合ってくる。

C児「OK、OK」と英語でD児に伝える。

D児はにっこりする。

C児「スキップしてきて、ピアノが止まったらジャンケンするねん」と遊び方を伝える。

D児「・・・」分からない様子を見せる。

C児「スキップスキップ。ピアノ、ストップ。ジャンケン」と知っている英語を並べる。

D児「OK、OK」とにっこりして動き出す。

★保護者対応（初めての園外保育）

本園では、園外保育という慣習がない国から入園した保護者が不安にならないよう、準備物の見本を見せている。中国語が分かる保護者が手伝ってくれる中で、日本の行事にも安心して参加・協力している。文化の違いが不安ではなく、楽しみや期待になってほしいと願い、子供が楽しかったと感じられるように配慮している。

「先生と子供だけで電車に乗って遠いところまで遊びに行くことは想像できない」という保護者に担任は「心配ですか？」と尋ねる。「いえいえ、日本の幼稚園は素敵です。集合場所が分からない」と答えるので、担任は「地図で一緒に確認しましょう」地図を見せる。すると、ある保護者が「集合場所まで一緒に行きましょう」と寄り添う声を掛けたことから保護者は安心した。また担任が「遠足は、お弁当ではなく食べやすいようにおにぎりにしていますが、いかがですか？」と尋ねると、保護者は「やってみます」と答える。担任は「子供が食べにくいようでしたら、食べられるもの用意してください。パンでもOK」と伝える、「分かった、分かった」と保護者は答えた。

④ 園運営上の必要となること（園長の役割を含む）

- ・ 幼児期に必要な多様な人との関わりや日本語以外の言語や文化との出会いを保障する。
- ・ 就学前段階での言語、文化的支援を実施する。
- ・ 通訳者など、人件費など雇用への配慮が必要である。
- ・ 多様性を前提とし、個別最適とインクルーシブを両立するための工夫が必要である。

⑤ 子供が経験し学んでいること

日常的に多国籍の子供がクラスや遊びの中に存在することで、子供が言語・文化の差異を自然受容することが可能となる。また異文化への興味や関心を肯定的に体験できる。

学校法人成城学園 認定こども園日吉幼稚園(大阪府)

「毎日の幼稚園での生活の中で、多様な人や言語、文化と出会う」

キーワード：遊びの中で外国籍の人と出会う(a)、遊びや生活を通した外国籍のスタッフとの関わり(c)、外国籍のスタッフの保育実践への理解促進(f)

① 園の特色・地域の実態

【園の規模】3歳児、4歳児、5歳児のクラスで構成され、園児数は442名

そのうち、外国籍の子供の在籍数は5名（2025年12月1日現在）

【教育目標】「社会を生き抜く体力のある子供」

【園の特色・地域の実態】大阪府北部の中核市・高槻市にある幼保連携型認定こども園である。自己主張できる自我を培い、子供自身が自分の力で何事にも向き合うことにこだわって保育を実践している。

【実践の紹介】月～金曜日9時～12時まで、常時4～6名の外国籍のスタッフが「安全見守り」と「遊びの相手」を担当している。外国籍のスタッフが常駐することで、日常的に多様な人が景色として存在することとなり、子供は言語・見た目の差異を自然に受容することが可能となる。また異文化（外見や出身国の話題）への好奇心を肯定的に体験化できることをねらいとし、子供と一緒に遊ぶ状況を設定している。

② 「カリキュラムとの関連」又は「活動の背景」

外国籍の在園児親子だけではなく、外国籍のスタッフが保育スタッフとして存在することで、多様性の経験としての関わりが生まれる。「一緒に遊ぶ」「一緒に生活する」ことで生じる人間関係は、「共感し合う」「手助けしてもらおう」「相談する」など多様な関係の形が発生する。そこで言葉や感じ方の違いを経験し、多様性を具体的に感じ取る柔軟な姿勢や適応力につながっていく。人件費にも配慮し、長期間勤務するスタッフと短期間で入れ替わるスタッフの組合せで、多様な国のスタッフに出会えるようにしている。今までのスタッフの国籍(2023.1～)は、イタリア・フランス・ドイツ・オーストリア・オーストラリア・バングラディシュ・スリランカ・スペイン・ポーランド・カメルーン・ネパール・チリ・韓国・インドなどである。

③ 活動の展開

★遊びにおける取組

サッカーや砂場遊びを一緒にするときには日本語以外を使ってコミュニケーションをするが、子供たちは日本語で明確に何かを頼んだり一緒に遊んだりしている。先生というよりは友達という感覚のようである。サッカー好きの子供たちは、外国籍の男性スタッフをいつも誘いに来て友達のようにつきあっている。一人か二人しかいないときでも、スタッフは気持ちよくつきあっている。

★外国籍のスタッフの名前の呼び方

子供たちは外国籍のスタッフの名前を呼び捨てにすることが多く、「〇〇さんと言ってね」と伝えていた。ところが外国籍のスタッフは、「私たちは先生(保育者)ではなく、子

供たちの友達と思っているので、呼び捨てのままでいいです」ということであった。こうしたことから、大人と子供、日本人と外国籍の人という枠を越えてイーブンでフラットな関係をつくっている。

★行事における取組

誕生会では「今月、誕生日の子供は何人いるかな」と人数を数えているが、子供たちから「英語で!」などとリクエストがある。そこで外国籍のスタッフに頼んで、子供と一緒に数えたりしている。フランス語・イタリア語・バングラデッシュやスリランカなど多様な国の言葉で数え楽しんでいる。日本語でも必ず数え、その際には「ひとり・ふたり・さんにん」という数え方を大切に扱っている。

★外国籍のスタッフの保育実践への理解促進

週に最低1度は正規外国籍のスタッフ（ポーランド国籍）に振り返りをしてもらい、多国籍のスタッフで意見交換をしている。その中で「普段の活動は日本語以外でコミュニケーションをすることが原則というのは分かっているが、危険なことなど急な対応が必要な事案の場合は日本語を使うほうがいい」ということが提案され、その意見を採用した。

④ 園運営上の必要となること（園長の役割を含む）

- ・ 幼児期に必要な多様な人との関わりや日本語以外の言語や文化との出会いを保障する。
- ・ 雇用する外国籍のスタッフの面接、採用時の研修や振り返り等を丁寧に実施する。楽しく勤務できるように勤務時の談話や情報共有を大切にすると共に、「意図性のある多様性」として、五領域の育ちにどう寄与するのかなどを解説する。

⑤ 子供が経験し学んでいること

日常的に多様な人が「景色」として存在することで、子供が言語・見た目の差異を自然受容することが可能となる。また異文化への好奇心（外見や出身国の話題）を肯定的に体験化できる。

学校法人三笠学園 認定こども園岩国東幼稚園(山口県)

「多文化の中で育まれる子供の心と学び」

キーワード：ALT職員(e)、遊びの援助者(e)、ALTとの仲間意識(e)

① 園の特色・地域の実態

【園の規模】1歳児～5歳児のクラスで構成され、園児数は約200名

そのうち、外国籍の子供の在籍数は1割程度（2025年10月31日現在）

【教育目標】「仏の子、清く、正しく、たくましく」

【園の特色・地域の実態】岩国市三笠町の住宅街に位置する仏教系幼稚園

【実践の紹介】主に米軍基地のアメリカ国籍の子供の受け入れを行っている。外国籍の子供の受入はクラスに各2名までを基本とし、1歳児から5歳児まで、1か月に1回、ALTによる英語活動を行っている。

② 活動の背景

ALTを配置することになった背景には、5、6年前に市が推進している英語教育の動向があり、パートタイムのALT職員（国籍：日本）に加え、令和7年度より、正規職員のALT職員（国籍：プエルトリコ）を配置することとなった。現在は、保護者への支援と日常の保育活動における子供たちへの支援を行っている。

英語に親しむ際は、日本人とアメリカ人の子供にとって快適な英語環境をつくることに重点を置いている。内容は、簡単な歌、簡単なトピック、カリキュラムに基づいたアクティビティなどを活用し、言語レベルに関わらず、全ての子供もたちが楽しく参加できるよう、日常会話、動物の名前、鳴き声など、身近で親しみやすいトピックを通して、アメリカ人と日本人の文化の違いを紹介するよう努めている。

③ 活動の展開

★状況や場面に応じたコミュニケーション

普段から、園児たちは簡単な挨拶ややり取りの中で、お互いに英語や日本語を使ってコミュニケーションをとっている。

例えば、アメリカの子供が使う日本語では、「おはよう、さようなら、またね、ありがとう、ごめんなさい、見て、こっちきて、かして、だめよ、いいよ、だいじょうぶ、いれて、どうぞ、これ〇〇君の」などである。また、日本人の子供が使う英語では、「Hello、Good bye、See you、Thank you、Sorry、Good job、Don't worry、Not nice、OK、Oh!no! Oh my Good」などで、状況や場面に応じて表現している様子が見られる。

ALTがアメリカの子供たちに活動を促す際等に使う簡単なフレーズを、日本の子供たちもまねをして使ったりする場面もよくある。

例えば、「Sit down please. Wash your hand、Come on、Look at me、Clean up、Stop、Take off shoes」などである。この積み重ねから、どうしても相手に伝えたい思いがあるときは、自分が知っている単語を引き出し、表情やジェスチャーを交えながら、何とか伝えようとする強い意思を感じ取ることができる。

★ALTの遊びの援助

日本人の子供と比較してアメリカ人は活発な子供が多いが、本園の子供たちは外国籍の友達に慣れているので、アメリカ人の子供が途中で入園してきても、物怖じせず、すぐに遊びの輪に入れることができる。また、困っている姿を見ると積極的に手助けしようとして、英語での伝え方が分からない時は、ALTに「これは、英語で何て言うの？」などと積極的に尋ねたりする様子も見られる。

★ALTとの仲間意識 5歳児

5歳児がALTと一緒に英語遊びをする。形式は一斉的に保育を展開し、「head」「shoulder」「knee」「and toes」の歌を歌いながら身体全身を使いながら遊ぶ。その後、ハロウィンにちなんだ「福笑い」をする。ALTは、活動の流れを日案のように計画し、決められた時間の中で多文化に触れる機会をつくっている。

5歳児クラスには外国籍の子供はいないが、ALTの存在がいることで、自然と仲間意識をもち、単語の英語を使ってコミュニケーションをとっている。英語の絵本の読み聞かせも行っており、英語の絵本やICTを活用したデジタル絵本の導入をしている。

④ 園運営上の必要となること（園長の役割を含む）

- ・ 多文化を受容することについて、共通理解を図る。保育者も理解していくことが大切だということを共有している。
- ・ どのような小さな問題も放置せず、困ったことがあれば、すぐに相談できる体制を整えることが必要である。

⑤ 子供が経験し学んでいること

外国籍の子供たちを受入れたことで、多様性への理解と受容する心が育まれている。異なる文化的背景をもつ人と日常的に関わることで、子供たちの中に自然と他者を思いやる気持ちや、異文化を受入れ入れ理解しようとする敬愛の精神や態度が培われている。

また、言語や習慣、価値観の違いに触れることで、自分自身の育った環境（日本という国）へのアイデンティティを知るきっかけにもなり、多角的な視点や柔軟な思考が育まれている。

学校法人吉田学園 認定こども園岩国川下幼稚園(山口県)

「遊びや生活に入り込む英語講師」

キーワード：英語講師(f)、遊びに加わる英語講師(f)、多文化理解の感覚(f)

① 園の特色・地域の実態

【園の規模】0歳児から5歳児のクラスで構成され、園児数は105名

そのうち、外国籍の子供の在園数29名（2025年12月1日現在）

【教育目標】「I(International) F(Friendship) C (Communication)」子供たちの「想像力」を育む教育機関づくり

【園の特色・地域の実態】創立94年を迎え40年以上にわたり米軍関係の子供が在籍してきた歴史をもつ。子供たちは園生活の中で自然に英語に触れ、国際的な環境の中で成長している。多国籍の子供や大人が共に過ごし、多様な文化に触れながら互いを尊重する心を育む場となっている。地域の農家との交流活動も行い、自然や食への理解を深める機会をつくっている。

【実践の紹介】園内では日本語、英語、スペイン語、中国語など、様々な言語が飛び交い、多文化が自然に息づく環境が広がっている。現在は、ルワンダ、カナダ、イスラエル、アメリカ、キルギス、ドイツ等の国籍をもつ5名の英語講師が職員として在籍し、国際的な教育環境を支えている。

② 活動の背景

生活や遊びの中で自然に国際的な学びにつながるよう、担任と英語講師がチームで保育を行う体制を整えている。英語講師は英語活動のみならず、登園、戸外遊び、食事、片付けなど一緒に過ごすことで、子供たちが構えることなく英語や異文化に触れ「伝えたい」「もっと知りたい」という気持ちを育んでいる。こうした日常的な関わりが、国籍や言語の違いを超えて相手の気持ちを理解しようとする姿や、自分の思いを言葉で表そうとする姿につながる。人は皆違い、他者の考えもまた素晴らしいと認め合うことができる大人に成長してほしいと考えている。この体制を整えた背景には、7年前、受け身の英会話教室型の活動だけでは、これからの社会に求められる力『自分の考えを言葉で伝え、互いを尊敬し合う力』を育てるには不十分だと感じ、その課題意識が現在の保育につながっている。

③ 活動の展開

★言葉に親しむ経験「Make it round, round, round, round!」

子供たちが夢中になって泥だんご作りをしていると英語講師がそっと遊びに加わった。子供たちに英語講師は「Soft? Hard? Which one? (やわらかい? かたい? どっち?)」と笑顔で声を掛ける。子供たちは泥を触りながら、「This is soft! (これはやわらかいよ!)」とまねしたり、「Look! Shiny! (みて! つるつる!)」と、聞いた言葉を使ってみたりしていた。英語講師も一緒に泥だんごを丸めながら、「Make it round, round, round! (まあるく、まあるく!)」とリズムよく声を掛けると、子供たちも嬉しそうにまねをして、遊びがさらに広がった。泥だんごという身近な遊びの中で子供たちは自然と英語に触

れ「英語は特別なものではなく、身の回りにある“言葉”の一つ」という感覚が育つ。構えず、楽しみながら“言葉”に親しむ経験が、これからの学びにつながっていく。

★トラブルは相手の思いに気付く機会

外国籍の子供と日本籍の子供が共に生活する中で起こるトラブルは、国籍の違いだけが要因だとは考えていない。国籍に関係なく幼児期に社会性を身に付けていく過程で、日常の小さな行き違いや衝突が要因だと捉え、自分と友達との違いを知り、相手の思いに気付く学びの機会であると考えている。例えば、年少児の4月、アメリカ人のA児が日本人のB児が遊んでいる遊具を欲しくて何も言わずに取り上げた。B児は泣きながら「だめ！」と強く訴え、A児はそれに驚き泣き出した。入園したての子供によくある事例だが、外国籍の子供は言語理解が不十分なため、相手の要求が「攻撃」に聞こえてしまう。英語講師は言葉の壁を乗り越えるための配慮も必要になる。年長になると言葉でやり取りができるようになる。日本人の子供は、簡単な英語で「No! I use now!!」「My turn」等、外国籍の子供は「わたしもあそびたい」「かして」などと言えるようになる。英語講師はトラブル時に「伝えたい」という子供の強い意志を感じ、見守ることが多くなる。言語を超えて関係性が深まるチャンスだとも考えている。

★身近な人を通して世界に触れる体験 4歳児

外国籍の子供やその家族が英語講師を通して日本以外の文化にも興味や関心が向かうように保育を計画している。年中児が英語講師の黒人女性に「どうして先生のお顔は黒いの？」と素直な疑問を投げ掛けた。担任と英語講師は、この出来事を「世界には様々な人種がいることを学ぶ入口」と受け止め、まず自分たちの住む地域について知ることから始め、世界へ視野を広げる探求を進め、その一環として英語講師の出身国の食べ物を調べる活動に発展しつつある。英語講師は、映像等を使い母国の料理を紹介するなど子供の学びに大きく関わっている。子供たちは目の前にいる英語講師から直接食文化を紹介してもらうことで「自分たちとは違う文化が実際にここにある」という実感をもって理解を深めている。身近な人を通して世界に触れる体験は、単なる知識ではなく違いを自然に受け止めながら自分の生活と世界がつながっていることに気付く学びへとつながっている。

④ 園運営上の必要となること（園長の役割を含む）

- ・ 遊びを中心とした保育を基盤に多様な経験が得られるよう、教職員が確認し合う体制を整える。学び続けられる研修環境や安心して働ける職場づくり、互いを尊重し合う関係を築くことが大切である。
- ・ 家庭や地域とのつながりを重視し、学びを園外へと広げる。
- ・ 30年後を見据えた園運営を行う。卒園生が「自分の子供を入園させたい」と思える幼稚園であり続ける。

⑤ 子供が経験し学んでいること

子供たちは、言葉や見た目が異なっても、みんな同じ人間であるという理解を深めている。日々の関わりの中でトラブルが起こった際には、どのように仲直りをすればよい

のかを学び、思いやりや「違っていてもよい」という心が育っている。英語など他国の言葉に触れる経験を通して、自分も世界の一員であることを実感している。さらに、自ら問いをもち探求しようとする姿が生まれ、自分の気持ちを言葉で表現する力も身に付いている。

学校法人四国大学 四国大学附属認定こども園（徳島県）

「外国籍の大学教員との関わりから異なる文化と出会い、広がり、深まっていく」

キーワード：外国籍の大学教員(c)、日常の中の豊かな経験(c)、言葉による遊び(c)

① 園の特色・地域の実態

【園の規模】0歳児から5歳児で構成され、3・4・5歳児クラスについては、各学年3クラスにより編成

【教育目標】たくましい子 ・自分なりにいっしょうけんめい取り組む

・自分の力で考えたり工夫したりする

豊かな心をもつ子 ・感動する心をもつ、

・思いやりのあるやさしい心をもつ

明るく元気な子 ・友達と一緒に力いっぱい遊ぶ、

・話を聞いて自己表現する

【園の特色・地域の実態】徳島県徳島市の吉野川に隣接する自然あふれる大学構内に位置する。昭和41年に四国女子短期大学附属幼稚園として創設し、平成28年に幼保連携型認定こども園として認可される。英語であそぼう、中国武術、阿波踊り、墨でかこう、化学あそび、クッキング、子育て相談など、大学各学科との連携による専門性を生かした教育プログラム・子育て支援を実施するとともに、大学生・留学生との交流も行っている。

【実践の紹介】「英語であそぼう」では、3・4・5歳児を対象に大学の外国籍の専任・兼任教員による英語と外国文化を生かした遊びを行っている。発達過程を踏まえたカリキュラムを通して、大学教員や担任、友達と関わって言葉による様々な遊びを楽しみ、自分なりの表現の方法を見付けている。

② 「カリキュラムとの関連」又は「活動の背景」

外国の文化に触れることでグローバルな視野を得ることをねらいに、平成17年頃より大学の外国人教員による「英語で遊ぼう」を開始した。遊びながら英語にふれることで異文化に関心をもつことを大切にしている。大学教員と担任で日程調整を行い、4歳児・5歳児は年間10回、3歳児は10月から開始して年間6回の活動を行っている。大学教員が作成したカリキュラムを園と共有している。

3歳児は、新入児が多いため、園生活に慣れ親しむ時期を経てから「英語であそぼう」が始まる。緊張することもあるが、S先生（女性。元大学教員で現在は、非常勤講師として大学に勤務）の優しく温かな雰囲気の中で、英語や異国の文化に出会う経験をする。遊びの中でS先生との触れ合いを楽しみ、英語で遊ぶだけでなく、生活を広げていく機会にもなっている。4歳児は、R先生（男性。文学部准教授）のユーモアあふれる魅力の中で表現することを楽しみ、喜んで英語を使って遊ぶ。4歳の学年では、アメリカにある大学の姉妹校から留学生が来た際に交流の機会をもっており、R先生との経験を基にしながら、いろいろな人との触れ合いや異なる文化と出会う経験を増やしている。5歳児では、スマートで力強い雰囲気 of M先生（男性。文学部教授）と一緒に言葉や身振りなどの表現を楽しみ、M先生に教えてもらった英語を使って友達や担任とコミュニケーション図っている。

「英語で遊ぼう」の他にも、藍染作家の大学教員と一緒に藍染めハンカチを作り祖父母にプレゼントしたり、大学生と一緒に阿波踊りを楽しんだり、栄養学の大学教員と一緒にクッキングを行ったり、中国人の大学教員と一緒に中国武術をしたりと大学教員の専門性を生かした活動や大学生との交流を行っている。大学キャンパス内に出掛けると、外国人教員と英語で挨拶を交わしたりする。園の教職員ではないが全くの園外の大人でもなく、ちょっと身近な人として日常の中で出会いを重ね、親しめる環境や関係性にある。

③ 活動の展開 3歳児・4歳児・5歳児

★3歳児：12月「英語であそぼう」

S先生は大きなカバンを取り出し、「Five Little Monkeysをやろう」と言って、動物のぬいぐるみを出す。「Five Little Monkeys」は以前の活動で経験があり、子供たちの表情やしぐさが期待感でいっぱいになる。S先生は「お母さんの役をしてくれる人は？」と子供たちに問い掛け、手を挙げた子どもにぬいぐるみを渡す。「最初に落ちる子供の役をしてくれる人は？」「2番目に落ちる役をしてくれる人は？」というように子供に問い掛け、挙手をした子供の中から役を決めたり、希望した役になれなかった子どもには、「次にね」と声を掛けたりしていく。役になった子供たちが音楽に合わせてぬいぐるみを動かす。堂々と動かす子供もいれば、希望したものの、みんなの前に立つと恥ずかしくなってしまう子供もいる。担任がそっとそばに寄り添うと恥ずかしそうにしながらも、小さくぬいぐるみを動かし始める。担任は子供の気持ちを受け止めながら、何をしたらよいか分からないときのサポートを意識している。S先生は音楽に合わせて楽しくお話を進めていく。

S先生が別のカバンから大きなかぼちゃのぬいぐるみを取り出すと、子供たちは10月のハロウィンを思い出し、期待感でいっぱいになる。輪になって、音楽に合わせてながらかぼちゃを隣に渡す遊びが始まると、すぐ渡そうとする子供や少しでも長く持とうとする子供など、それぞれの方法で楽しむ。

活動後、S先生が片付けをしていると、一人の子供が担任教師と一緒に「S先生はどこから来たの？」と尋ねる。S先生が「徳島よ」と答えると、子供はちょっと困った顔をする。担任が「この前、S先生はこの国から来たんだらうって話していたんだよね」と言うと、S先生、担任、子供たちが笑い合う。

★4歳児：12月「英語であそぼう」

R先生が絵と英語・日本語の文章が1つの画面になるように手作りした紙芝居を使って「Is That You Santa? (サンタさんなの?)」のお話をする。R先生は英語でセリフを話した後、英語と日本語を交えながら説明をしたり、子供たちに問い掛けたりやりとりしながらお話を進めていく。登場人物に合わせて声の大きさや調子、話し方を工夫しユーモラスに語る。R先生の語りの魅力に子供たちは引き込まれながら一緒に英語のセリフを口ずさんだり、声を合わせて英語のセリフを言ったりしている。お話の後、「クリスマスプレゼントに何が欲しい？」との問い掛けに子供たち一人一人が順番に答えていく。R先生は一人一人の答えをニコニコと受け止めたり、面白がったりする。全員が答えた後、クリスマスの挨拶としてMerry Christmas!を言い、「お正月には、何て挨拶する?」「Happy New Year!って言うんだよ。言ってみて」と促す。子どもたちが「Happy New Year!」と声にすると、「お正月におじいちゃんおばあちゃんに会った

ら、Happy New Year! って言ってみて。おじいちゃんおばあちゃん、びっくりするから！」といったずらっ子のように言う。子どもたちも笑顔で「Happy New Year!」を繰り返す。

★5歳児の「英語であそぼう」におけるM先生と担任の教育的意図や工夫

M先生は、5歳児の目的を「英語を通して、ことばを使って人と関わる喜びを体験し、外国の歌や遊びを用いて体験的に理解を深め、言葉を聞こうとする態度の育成をする。」としている。M先生が指導する大学生が中心になって指導をする機会がある。その時、担任は離れた場所で見守り、活動後、大学生に指導のポイントや伝わりやすくする工夫を提案する。大学生の指導や提案を通して、担任との間で指導の共有や振り返りの機会にもなっている。

発問タイムでは、M先生の問い掛けに子供たちは答えたい気持ちがある。担任は普段、発言しない子供を指名したり、指名の際に「なわとびを特訓して頑張っていた〇〇ちゃん」と紹介し、ここでも頑張ってもらえるように促したりしている。M先生とのやりとりが英会話の練習だけではなく、みんなの前で気持ちを伝える経験になるようにしたいと考えている。参加できたことへの自信を得て、活動に関わる成功体験につながるように。そういった子どもの頑張りや担任の思いを受け止めて、M先生も子供の言葉に対して「Great!」と賞賛し、受け止めている。

★4歳児：外国人大学生との交流（学生9名+教員4名）

毎年1回、アメリカから大学に訪問があり、交流を園の行事予定に組み込んでいる。アメリカの大学生とフルーツバスケットを一緒にしたり、子供たちが阿波踊りを披露したりして、交流を図っている。身振り手振りのコミュニケーションや単語を使って関わり、ネイティブな英語に触れる機会になっている。最初はお互いに緊張感があったが、日頃、子供たちが関心をもっている遊びを大学生に見てもらったり、「英語でなんて言うの？」と質問して教えてもらったり。教えてもらったことを忘れないように英語で書いてもらうこともあった。交流当時、世界的に流行していた配信動画のダンスを大学生と一緒に踊った。交流後も時折、思い出して話をしている。R先生との経験があるため、より身近に感じられ、日常の生活の中で心に残る体験の一つになった。

④ 園運営上の必要となること（園長の役割を含む）

- ・ 保育は子供の主体性や興味関心に合わせ、教員の願いや思いが自然と交わるようにしていきたい。教育課程では、3歳は出会う、4歳は広がる、5歳は深まるという道筋で編成され、教職員間で共有している。特定の活動を切り取って捉えるのではなく、園生活の中で自然と広がっていく。例えば、運動会で万国旗を張ったら、日本だけではなくいろいろな国があることを知り、そこから興味をもって図鑑や地図に遊びが広がっていく。また、家庭においてテレビでスポーツの世界大会を観るときに国旗を見て国を区別することもある。興味や関心、多様な体験が園生活の様々な場面の中に溶け込んでいくように、年間指導計画や週案を工夫している。
- ・ 教育課程を基に作成された年間指導計画には、大切にしていることを書き込んでいる。基本となることを毎年再確認し、その年の子供の姿に合わせて計画している。また、短期の指導計画は、1週間を1枚にして計画と記録を各担任が書いている。書く内容や書き方は担任により異なるが、計画と記録をまとめることで軸がずれない。計画と記録を基に子供理

解を深め、子供の育ちの方向を意識するとともに、園の保育観・子供観を共有し、長期的な発達の見通しをもって保育に臨んでいる。

- ・ 認定こども園になってから、教職員全員がそろう会議はできないため、日頃から子供のことについて自然と語り合える雰囲気づくりを心掛けている。現状を共有することで、助言や新しい考えも生まれる。各学年の主任教諭と主幹教諭が集まって話し合う主任会では、各学年で話し合った保育の流れを持ち寄り、さらに話し合っている。縦と横のつながりが生まれ、園全体が自然と流れるような保育、活動の展開になると考える。教職員の連携を密にすることで、0～2歳児の生活と3歳児以上の教育・保育がなだらかにつながっていくように配慮している。
- ・ 大学の理事長・副理事長とは運営において常に相談をしている。また、大学の教職員との連携の仲立ちは、大学事務局から異動してきた事務職員が行っている。保育や子育て支援、研修・研究に関して、大学と認定こども園でつながりをもち、様々な施設を利用した保育も本園の魅力の一つである。

⑤ 子供が経験し学んでいること

「英語であそぼう」をはじめ、大学との様々な連携による質の高い保育は、個別の特別なイベントではなく、日常の中の豊かな経験として子供たちの生活に位置付いている。

地域の伝統文化や異なる国の文化との出会いは、子供の興味や関心を広げ、日常の遊びや生活を深めている。体験の中での学びが、様々な概念や意味を知る機会となり、世界に対する関心を広げている。

本山町立本山保育所(高知県)

「ALTと共に過ごし違いを認め合う」

キーワード：ALT(外国語講師)(e)、違いを認めて仲間(c)、英語に親しむ(e)

① 園の特色・地域の実態

【園の規模】0歳児から5歳児のクラスで構成され、園児数は73名（2025年12月1日現在）

【教育・保育目標】「ひとりひとりが大切にされ、安心して過ごせる保育所をめざす」

【園の特色・地域の実態】高知県の中山間に位置する町内唯一の幼児教育施設として、給食の約8割を地元産の食材でまかなうなど、地域との連携も活発に行われている。

【実践の紹介】ALTは、教育委員会から派遣され、取組は10年以上続いている。週に一度、園を訪問。子供の遊びや生活の中に入って一緒に過ごす関わりを重視し、他文化への親しみを深めている。

② 活動の背景

小中学校でALTの取組が始まった。保小中の連携が進む中、外国籍の子供はいない地域であるが、幼児期から英語に触れたり外国の文化に触れたりする直接体験を通して国際教育理解を深めることが大切という考えから、10年以上前に教育委員会がALTを派遣するようになった。

4年前より、ALTが園内の子供に決められたカリキュラムの中で文化や言葉に触れる機会を提供する際、戸惑いや緊張が見られたことをきっかけに、ALTが子供の遊びや生活の中に入って一緒に過ごし関わる取組に移行してきた。園では、ALTと一緒に遊ぶ、ALTが使う言葉を聞くという単発の経験ではなく、生活や遊びの積み重ねの中で文化差や表現の違いを自然に受け止められる環境づくりを意図的に行ってきた。現在では、ALTが来園する曜日を心待ちにする子供が増え、『異文化と出会う日ではなく、仲間が来る日』として定着している。

③ 活動の展開

★英語をまねしながら使うA児

ALTが園庭での鬼ごっこに誘うと、A児は少し距離を取りながら様子をうかがっていた。一方でB児はALTに駆け寄り、「Ready go?」と英語のまねをしながら嬉しそうに声を掛けた。ALTが「Ready…go!」と両手を広げると、A児は、言葉は分からないけれど楽しそうな表情で、少しずつ走り出した。B児はALTのジェスチャーをまねしながら、「One more! One more!」と繰り返し声を掛け、遊びはどんどん広がっていった。A児は始めこそ不安げであったが、ALTの表情・声の調子・身振りを手掛かりに「違う言葉でも伝わる」「言葉が違ってても大丈夫」という感覚を遊びの中でつかんでいった。

★ALTは学級の仲間 5歳児

運動会前、5歳児学級では毎日リレーの練習を重ねていた。しかし、特別支援児を含むチームがなかなか勝てず、C児が「もう楽しくない」とつぶやいた。その言葉をきっかけに、学級全体で話し合いの場がもたれた。C児は「頑張っているのに勝てないと嫌になる」と率

直な気持ちを話した。A児は「ゆっくりでも一緒に走りたい」と伝え、B児は「どうしたらみんな楽しいかな」と意見をつなげた。この場にALTも“学級の仲間”として参加し、「みんなで楽しめるようにするためにはどうしたらいいか、みんなで考えたらいいよね!」と、子供たちの気持ちに寄り添う言葉を日本語で投げ掛けた。子供たちはALTのまなざしや表情から、ALTの言葉をそれぞれに理解しようとする姿がうかがえた。“誰かを責める話ではない”という安心感を汲み取り、それぞれが自分の言葉で気持ちを伝え、想いを重ねていった。最終的にC児は「負けてもいい。みんなでバトンをつなぐのがいい」と気持ちを整理し、学級全体として“勝敗より仲間と走る楽しさを大事にする”という共通理解が生まれた。

★英語を使ってみよう 5歳児

ある日、5歳児が園庭で鬼ごっこをしていると、C児が突然「Stop!」と声をあげ、みんなが一斉に止まる遊びが始まった。B児は「Go!」「Wait!」とALTの口調をまねしながら役割を変え、A児もその輪に入り、「One more!」と恥ずかしそうに、でも嬉しそうに声を出した。ここには、“英語を使おうと努力する姿”ではなく、“楽しいから使ってみよう”という自然な姿があった。さらに、ALTが紹介した新しい遊びをC児がクラスで提案し、「ALTがね、こうやってやってたよ」と身振り手振りを添えて説明すると、A児もB児も「やってみよう!」とすぐに挑戦した。この姿は、“言葉の違いを越えて仲間の表現を柔軟に取り入れる力”“『知らない』に対する肯定的な態度”“文化の違いを『おもしろい』と受け止める姿勢”が、日々の積み重ねの中で育っていることを示す場面であった。

④ 園運営上の必要となること（園長の役割を含む）

- ・ 職員が抵抗感を抱かないよう、年度初めにALTとの関わりの意義や取組内容、保育上の配慮を丁寧に共有する。
- ・ 担任が一人で抱え込まず、園全体で異文化交流の意味を捉えられるよう、職員会議やケース検討で振り返る時間を設ける。
- ・ ALTが園で安心して活動できるよう、環境面・動線・情報共有を整える。

⑤ 子供が経験し学んでいること

子供たちは、外見や言葉、表現の違いを超えて相手を仲間として受け入れ、分からないことにも「まずやってみよう」と前向きに関わっている。その中で、異文化に触れることを日常の一部として楽しみながら、集団遊びやチーム活動を通して違いを認め合い、自分の思いを伝えつつ友達と折り合いをつけていく経験を重ねている。さらに、子供同士がALTの表現を取り入れて遊びを発展させる姿に見られるように、柔軟な受容力と創造性が育っている。

国立大学法人福岡教育大学 福岡教育大学附属幼稚園（福岡県）

「保護者による活動を通して異なる文化を身近に体験する」

キーワード：城山キッズ（d）、外国と関わりのある保護者（d）、大学との交流（e）

① 園の特色・地域の実態

【園の規模】3歳児、4歳児、5歳児の各1学級で構成され、園児数は46名

【教育目標】「豊かな心をもち、自己を十分に発揮し、心身の調和のとれた発達と生きる力の基礎を身に付けた幼児の育成」を教育目標とし、「育てたい3つの種」として「①あいさつの種：身近な人をはじめ、誰に対してもあいさつをする種」「②なかよしの種：あったか言葉をつかって、友達となかよく遊ぶ種」「③がんばりの種：いろいろなことに夢中になって、粘り強く取り組む種」とわかりやすい形で具体化して子どもや保護者等にも伝え、子ども・保護者等と教職員が育ちの方向性を共有できるようにしている。

【園の特色・地域の実態】福岡県宗像市の城山周辺の自然豊かな環境と福岡教育大学との連携による教育が特徴。福岡教育大学と隣接しており、大学教員や学生との交流がある。

【実践の紹介】子供たちは、日常の生活の中で、大学教員や学生など様々な人と関わって親しむ経験を重ねている。そのような生活の重なりの中で、保護者有志によって計画・実践された異なる国々とつながる体験の機会を通して異なる国や文化を身近に感じて、関心を深めている。様々な人との関わりや異なる国や文化につながる体験を基に、遊びの中に自分なりに取り入れ、異なる文化に興味関心が広がっていく基盤となる「種」を見付けている。

② 「カリキュラムとの関連」又は「活動の背景」

福岡教育大学に隣接し大学と連携が密に行われており、大学教員や大学生との交流や大学との共同研究の機会を設けている。学生の実習や留学生との交流だけでなく、例えば、音楽教育研究ユニットの教員と学生が誕生会の中で演奏を行うなど、食育・栽培活動・卒園製作等の様々な形で大学の教員・学生と関わる機会をもっている。

遠足やファミリーデー、参観、懇談会、誕生会といった保護者が関わる行事や毎日の送迎時の関わりなど、保護者と教職員の関わりが密に行われている。また、保護者が積極的に幼稚園に関わり、例えば、保護者有志による草刈りや大学祭における幼稚園のマルシェなど主体的に関わってくださる。絵本の部屋を活用したPTAによる「ふぞく文庫」の貸出、保護者有志のサークル「城山キッズ」の活動や「城山ソウル」によるおはなし会の開催など、保護者の力を取り入れながら特色ある取組をしている。

③ 活動の展開

★城山キッズの活動「飛行機に乗って世界を旅しよう」（全国国立大学附属学校PTA連合会令和6年度PTA団体表彰 会長賞受賞）

城山キッズはPTA活動の一環で、「できる人が、できる時に、できることを」をスローガンに保護者有志が保育時間の中で子供たちとともに活動を楽しんでいる。城山キッズの活動は全学年を対象として、保護者らが話し合って決め、準備や当日の活動も進める。教師は相談を受けることはあるが、保護者がアイデアを出し合い、道具等も全て保護者の手作りで保護者も楽しみながら行っている。

令和6年度には「飛行機に乗って世界を旅しよう」の活動に取り組んだ。航空会社に勤務していた経験のある保護者がリーダーとなり、保護者らは「世界は広く、異文化や多言語、違う生活があることを園児に伝え、世界に興味をもつきっかけをつくりたい」と考え、「活動への参加のきっかけをつかみにくかった海外出身の保護者もPTA活動に参画できるような内容を企画することで、海外出身の保護者を巻き込んだ活動をしたい。個々の強みを発揮できる環境をつくりたい」と考え、外国人保護者や外国での生活の経験のある保護者も参加して、年間5回の活動を行った。自由参加型でできるときに参加する形にすると過半数の人が年間を通して参加でき、海外出身の保護者にも活動の機会をつくることができ、保護者一人一人の強みを生かしてパフォーマンスを発揮できた。

飛行機に乗ったことのない子供も多い中、経験のない子供も疑似体験することができた。子供にとって最も身近な保護者が旅を演出するので、よりリアルに世界を体験できるとともに、異なる国や文化をより身近に感じることができ、グローバルな見方、考え方の「種」につながった。子供にとって遠かったものが身近な保護者が行うことで身近に感じ、自分の住むところと違うけれど、同じように楽しいことがあることや自分にもできそう等、子供なりの楽しさを実感し、興味や関心が広がる基になっている。

令和7年度はリーダーが交代し、令和6年度の活動で世界を旅したことを発展させて、子供たちの興味や関心を踏まえて保護者らが話し合って「絵本の世界に飛び込もう」として絵本を旅する活動を企画して実施している。絵本の選書は保護者が行い、外国出身の保護者はその国の言語の絵本(英語や韓国語など)を読み聞かせてくださり、子供たちは言葉のフレーズやそのリズムにのって楽しむことができた。

★大学教員や学生等との関わり

毎月の誕生会では、毎回、園長が「絵本の読み聞かせプレゼント」を行い、大学の音楽教育研究ユニットの教員と学生(中等教育教員養成課程音楽専攻)が、「音楽のプレゼント」を披露する。学生にとっては、就学前の子供たちへの質の高い音楽体験の提供方法を学ぶ、実践的な教育研究活動の場となっている。クラシック音楽の生演奏や歌が中心のため、外国語で歌うこともあり、子供たちは年間を通して、ピアノだけでなくホルン・トランペット・チューバ・トロンボーン・バイオリンなど外国の様々な楽器に出会い、美しい音色を楽しむ場になっている。そして、曲にまつわる写真や話を通じて、いろいろな国の言葉や文化などに触れる機会となっている。

また、毎年12月のクリスマスに近い時期になると、「お楽しみ会」を行っている。長年、大学の英語教育研究ユニットの教員(外国の方)の協力により、教員自らがサンタクロースに扮している。「あわてんぼうのサンタクロース」の曲の途中で突然登場するサンタさんに、子供たちは驚きと喜びを隠しきれない。そこからは、随行した英語教育研究ユニットの学生が通訳をしながら、進行役を務める。はじめに、サンタクロースが英語で子供たちに挨拶やクリスマスにまつわる話をし、次の質問タイムでは、子供たちの興味や関心のもと、活発に素朴な疑問をぶつける。中には、通訳を介さず直接、英語で質問をする子供も数名見られる。そして、プレゼントタイムでは、サンタクロースが一人一人にプレゼントを渡し、英語で言葉を掛ける。握手をしながら「サンキュー」「シーユー」などと、英語で言葉を返す子供の姿も見られる。

このように、「お楽しみ会」を通して、子供たちがサプライズを楽しみながら、生の英語に触れ英語に親しむことができている。令和7年度は、事情により大学の教員が担当できなくなったため、保護者（外国の方）がサンタクロースに扮した。今後も、「お楽しみ会」を途切れさせることなく、子供たちが生の英語を楽しむことができる貴重な取組を続けていく予定である。

★ 日常生活における子供の姿

豊かな自然環境の中にある幼稚園で少人数のアットホームな雰囲気があり、子供たちは話をするのが大好きである。子供同士や教師との関わりだけでなく、保護者や大学関係者など様々な人と関わる機会がある。自分がどうしたいか、どうすればよいかを考えて遊ぶ時間が確保されており、遊びの中で学ぶことが保障されている。

保護者との城山キッズの活動や大学関係者との活動を通じた経験から、それぞれが自分の中で昇華して、いろいろなところにつながっている。地図や地球儀に関心をもつ子供もいれば、ダンスに興味をもつ子供もいる。竹馬をつくるときにバンブーダンスを思い出す子供もいる。食べ物に関心をもちどのような味がするのか興味をもつ子供もいれば、楽器の図鑑を使って調べ、楽器をつくる子供もいる。

④ 園運営上の必要となること（園長の役割を含む）

- ・ 活動を行うことで劇的な変化をねらっているのではなく、興味や関心が広がる基をつくっている。幼児期はこれから成長していく土壌であるため、豊かにいろいろな人や国に出会うことがこの先、興味や関心が広がっていく基＝「種」を育てていると考える。
- ・ 子供たちへの話の中で、よく3つの種を取り上げている。行事等では保護者も一緒に話を聴くので、保護者に園の教育理念が伝わっている。子供たちも種を意識しているし、保護者からも活動を通して「私たちも種をまいてもらっている」という言葉があり、保護者の取組が園の教育課程・指導計画につながる活動になるし、子供のための取組、保護者と子供と一緒に楽しめる取組になっていく。
- ・ 外国の文化に触れる機会だけでなく、保護者が中心になって餅つき大会を計画し、子供たちが体験する等、日本の伝統的な文化を楽しむ取組も行っている。外国籍の子供や外国につながりをもつ子供も毎年在籍しており、子供たちは、日本ならではの伝統的な文化も多文化も一緒に関わるができる。

⑤ 子供が経験し学んでいること

本事例は、3つの種という分かりやすい言葉で子供、保護者や地域（大学関係者等）と教育理念を共有しながら、保護者による活動の中で異なる国や文化を身近に感じ、楽しむ体験になっている。「開かれた教育課程」の下、園内外の様々な人との関わりを通して幼児期なりの世界の豊かさに出会うことで一人一人の興味や関心が広がり、異なる文化の体験による子供の気づきが日常生活や遊びを豊かにすることにつながっている。

（２）取組から得られる示唆

研究協力園の取組から得られる示唆

ここでは、研究協力園6園の事例から子供の生活における多文化の経験の位置付けの共通点や特徴として①言葉をはじめとする豊かな表現としての多文化との関わり、②身近な人を通しての多文化の関わり、③我が国の伝統文化・身近な文化・異なる文化との出会いについてまとめた上で、このような経験を支える教職員の組織的な取組の共通点や特徴として④教職員間の共通理解に基づく組織的な取組、⑤園長の役割について共通点や特徴をまとめていく。

① 言葉をはじめとする豊かな表現としての多文化との関わり

「多文化を楽しむ」実践は、英語等の外国語の習得を目的としたものではなく、様々な言葉の表現と出会い、関心をもってそれを生活や遊びの中に取り入れたり、様々な人と出会う中でコミュニケーションの方法として取り入れたりする経験として日常の生活の中の経験を豊かにするものとなっている。外国人の講師・外国にルーツをもつ子供等と出会い、その人との関わりの楽しさの中で異なる言葉の表現方法を知り、関心をもって自分でも話してみたり、その人の国の文化に関心をもって調べたり、その人の国と自分の国の違いや共通点に関心を向けるようになる。

② 身近な人を通しての多文化との関わり

ALTやNT、大学教員など定期的に関わる外国人、外国にルーツをもつ子供、外国人の保護者、外国と関わりのある職業等の経験のある保護者、留学生等といった子供にとって身近な人との出会いが契機となって異なる文化と出会うことで、異なる文化が子供にとってより身近なものとして感じることができる。物理的には遠く離れた国であるが、定期的に親しむ人、日常生活の中で親しむ大人や仲間を通して異なる文化が身近なものになり、自分の生活や遊びの中で関心をもって関わるができるようになる。

③ 我が国の伝統文化・身近な文化・異なる文化との出会い

各事例では異なる文化との出会いや関わりの場面が中心的に取り上げられているが、園の特色やカリキュラムとの関連・活動の背景等を通して各園で行われている日常の保育の様子を捉えると、特定の国の文化のみと関わるのではなく子供は日常の生活を通して様々な文化と関わっている。日常の保育の中で、我が国の伝統文化に関わる経験をしたり、その地域に根差した文化と関わる経験をしたり、様々な文化を経験する中で異なる国の文化とも出会う。子供は日常の生活や遊びの中で自然に多文化に親しんでいるのである。

④ 教職員間の共通理解に基づく組織的な取組

自園の教育目標やカリキュラムに基づいて異なる文化との関わりを保育の中にどのように位置付けるのか、自園の特徴や園内外の人的・物的資源に基づきどのように実践するのか、園の教職員の間で保育観や方向性の共有が行われている。活動の当初は「英語に触れる活動」として捉えていても、その位置付けや方法を教職員間や外国人の大学の講師とともに検討する中で「多文化に親しむ」実践として見方が変化していく。年齢や発達に応じて人と関わる力や表現

の豊かさの育成につながるように「多文化に親しむ」経験となるように組織的に取り組んでいることが分かる。

⑤ 園長の役割

園長は、幼稚園教育要領等が示す幼児教育の理念、自園の教育理念や保育観の下、「多文化に親しむ」保育実践が子供たちの社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えにつながるように、教職員との理念の共有を行っている。自園の組織編制を工夫したり、園外の機関との調整を行ったりする園もあれば、教職員の研修を行ったり、教職員が話し合っ子供理解を深めたり、保育理念を共有したりできるような仕組みをつくったりしている場合もある。

取材園の取組から得られる示唆

アンケート調査の結果から選定した13園の保育を見学したり、園(所)長や担当教職員へインタビューしたりした結果、a～fの6項目(第2章 2.) 1つに限定できず複数項目にわたる園も多かった。そこで、a～fそれぞれの視点から見た「園運営上の必要となること」と「子供が経験し学んでいること」の共通点や特徴、工夫を以下のようにまとめた。

a. 外国籍の幼児の入園を機に、他の国の言葉や文化への関心をもち広げる事例

園(所)長は、特別なカリキュラムを用意するのではなく、外国人の子供の入園を多様な人との関わりや日本語以外の言語や文化との出会いの機会と捉え、積極的でかつ柔軟な姿勢をもって受け入れている。一人一人への配慮は全員に通じる支援と考えて、園全体の協力体制をつくり日常の保育の中に外国人の子供が違和感なく入っていくことができる環境をつくることを心掛けている。

また、保護者に対して、園の方針等を説明し理解を求めるだけではなく、宗教や園行事、食事など個別に配慮する必要があることを話し合い、互いを尊重して歩み寄ることを大切にしている。園の教育活動の意図を外国人の保護者に伝えようとするのが、今までのやり方にこだわらず柔軟に考え、園の文化を見直すきっかけになっている。

子供たちは、日常的に様々な国籍の友達が存在することで、言語・文化の違いを自然に受け入れ、異文化の様々な違いを特別視するというよりは、楽しみや期待になって興味や関心をもって関わっている。そのような園生活は、いじめや他者を排他的に捉えることのない土壌を形成することにつながっている。

b. 地域に住む外国籍の方や卒園生が園を訪問し、その国の言葉や文化を紹介する事例

園(所)長は、地域や園の実態を捉え、英語に触れ親しみいろいろな人と関わる楽しさを大切にしたいと計画し、この経験がこれからの人への信頼関係、自己発揮の基盤となると考えている。また教職員は、子供たちと外国人の方とのやりとりを少し客観的に見て、子供たちの自己発揮・自己表現の新たな面を知り、幼児理解を広め深めている。そして、地域に住む外国人の元保護者にとっても、自身が講師になり他園でも継続して活動できることは、地域で活躍する人材の育成となり、共生社会をつくることにつながっている。

子供たちは、英語という言語や外国人の講師に出会い、園生活や友達との関わりに密接につながる挨拶や遊びのやりとりなどの英語に触れ楽しんでいる。そして、日常の使っている言葉の他にも言葉があることに気付き、その言葉でのやりとりができ人とつながっていくことを実感することが自信につながっている。

c. 外国籍の講師が、定期的に園を訪問し、園生活を共にしながら交流する事例

園(所)長は、外国人のスタッフや留学生を雇用し、日常的に多様な人と関わる園環境をつくっている。また、日本語以外の言語や文化と出会うことを大切にし、特別なプログラムや特定の活動としてではなく、子供の興味や関心に合わせながら園生活の中に異文化や多文化を自然に溶け込むように工夫している。また、地域のつながりや大学などとの連携を大切にし、講師からの言葉や文化の提供を求めるだけでなく、継続して園から地域や大学に発信することに努め、そのことが特色ある園文化になっている。

また子供たちは、日常的に自然な形で多様な人と多言語に触れ、異文化や多文化への好奇心をもち、様々な表現や人との関わりを楽しんでいる。そのことが異国の文化だけでなく、我が国や地域の伝統文化にも触れ経験を豊かにするきっかけになっている。外国人講師が定期的に園を訪問し交流を楽しむことが、自然な形で子供たちの興味や関心を引き出し発想の豊かさにつながっている。

d. 外国での生活経験をもつ保護者が、言葉や文化を伝える事例

園(所)長は、保育参観・参加や誕生会の誕生児の保護者として来園する際、外国人の保護者に子供たちと関わる機会を設けている。外国人の保護者は、自国の地図や国旗、挨拶などの言葉、文化としての遊びを教えたり、クラスの子供たち向けに絵本の読み聞かせをしたりしている。

子供たちは、いつも一緒に遊んでいる友達のお母さんに親しみを感じ、地理や文化(食べ物、乗り物、遊び、生き物など)・言葉・考え方などの違いに驚きや面白さ、世界とのつながりを感じて興味深く見聞きしたり、質問したり、簡単な挨拶をまねしたりしている。そして、未知の新しいことを知ろうとする意欲をもち、1つの国との出会いが、他の国への興味や関心につながっている。

e. 遊びにALTが加わり、外国籍の幼児の遊びの援助や他の幼児に英語での問い掛けを行うことにより、多文化理解の感覚をもてるようにする事例

ALTの活用には、園が地域や園の実態から外国の言語や文化に触れる機会をつくろうと考えたものと、自治体が国際教育理解を推進しようと園に派遣する場合がある。園(所)長は教職員や保護者に対し、ALTによる英語活動が早期英才教育ではないかという誤解や抵抗感、不安を抱かないよう、子供の遊びと生活を豊かにするためと理解を促す必要性を意識している。そして、ALTは園の教職員ではないので、遊びにも加わり自身の役割を見いだせるように、教職員とコミュニケーションを重ねることを大切にしている。

子供たちには、自分の思いを伝えよう、相手の気持ちを汲み取ろう、分からない・知らないことを知ろうとする意欲、やってみようとする積極性が育っている。自分自身の育った環境(日本)を知るきっかけになり、多角的な視点や柔軟な思考が育まれている。言葉

や見た目が違っていてもいい、みんな同じ人間と思えることは、互いを尊重し合うことにもつながっている。

f.その他 特色ある事例

特色ある事例は、園の特色や資源を生かしたり、地域のニーズから必要に迫られたりして取り組んでいくうちに「多文化を楽しむ心」を育むことにつながる実践である。いずれの実践も、時間をかけて継続して取り組んでいる中で、また試行錯誤しながらも実践を重ねる中で、多文化との出会いと交流が、いつのまにか子供たちの新たな世界をつくることにつながっている。その際、自治体の支援や関係団体等との連携など、外部の資源を活用している。

おわりに

本研究では、全国の幼稚園、保育所、認定こども園における多文化に関する多様な実践を収集し、その背景や取組の工夫、子供たちの姿を丁寧に整理してきました。調査を進める中で明らかになったことは、幼児教育の現場には、日々の生活や遊びの中に自然に多文化が入り込み、子供たちがそれを柔軟に受け止め、楽しみながら学んでいく力が備わっているということです。外国人の子供の入園をきっかけに他国の文化に関心が広がった事例や、地域の人々が自国の文化を紹介する活動、ALTなど外部人材が園生活に関わることで生まれる交流など、各園や地域の実態に沿った創意工夫に満ちた取組は、幼児期における多文化理解の可能性を大きく示すものでした。

また、これらの実践は決して特別なものではなく、日常の中にある小さな気付きや出会いを大切にしながら、子供たちの興味や関心に寄り添っていくことで育まれていることも印象的でした。幼児期は、言語や文化の違いを「違い」として捉える前に、まず「面白い」「やってみたい」「知りたい」といった素直な気持ちが芽生えるからこそ、この時期に多様な文化に直接触れる経験は、将来の学びや人間関係の基盤となり、互いを尊重し合う姿勢を育む上で大きな意味をもちます。

本報告書が、全国の幼児教育関係者の皆様にとって、園の実態に応じた「多文化を楽しむ心」を育む取組を検討する際の一助となり、環境づくりの推進につながることを願っております。

最後に、本調査研究にご協力いただいた全国の国公立私立園の皆様、そして多忙な中でのアンケート調査やインタビュー調査への協力、資料や写真の提供に深く感謝申し上げます。ここに収められた実践の共有は、本研究会にとっても貴重な成果となりました。皆様の熱意とご尽力に支えられ、本報告書をまとめることができましたことを、ここに心より御礼申し上げます。

令和8年3月

一般社団法人 保育教諭養成課程研究会

「幼児教育における「多文化を楽しむ心」を育むための特色ある取組の収集」

調査研究実行委員会

2025（令和7）年度 文部科学省委託

幼児教育における「多文化を楽しむ心」を育むための特色ある取組の収集

研究代表

一般社団法人 保育教諭養成課程研究会

理事長 無藤 隆（白梅学園大学大学院 名誉教授）

■プロジェクトリーダー 神長美津子（大阪総合保育大学 特任教授）

■事務局

山下 文一（高知学園大学 教授）

桶田 ゆかり（一般社団法人保育教諭養成課程研究会 理事）

大澤 洋美（東京成徳短期大学 教授）

島田由紀子（國學院大學 教授）

山瀬 範子（國學院大學 教授）

望月 文代（育英大学 准教授）

■アンケート調査

若尾 良徳（日本体育大学 教授）

島田由紀子（國學院大學 教授）

駒 久美子（千葉大学 教授）

望月 文代（育英大学 准教授）

■インタビュー調査

神長 美津子（大阪総合保育大学 特任教授）

山下 文一（高知学園大学 教授）

内田 千春（東洋大学大学院 教授）

後田 紀子（高知学園短期大学 教授）

大澤 洋美（東京成徳短期大学 教授）

大方 美香（大阪総合保育大学 教授）

小倉 庸寛（学校法人愛泉学園吉田保育園 園長）

桶田 ゆかり（一般社団法人保育教諭養成課程研究会 理事）

駒 久美子（千葉大学 教授）

篠原 直子（練馬区立光が丘むらさき幼稚園 園長）

島田 由紀子（國學院大學 教授）

津金 美智子（名古屋学芸大学 教授）

中橋 美穂（大阪教育大学 教授）

中屋 江利子（高知学園短期大学 准教授）
望月 文代（育英大学 准教授）
安見 克夫（学校法人安見学園板橋富士見幼稚園 園長）
山瀬 範子（國學院大學 教授）
横田 侑弥（高知学園短期大学 助教）
若尾 良徳（日本体育大学 教授）

令和8年3月1日現在

（敬称略・順不同）

幼児教育における「多文化を楽しむ心」を育むための特色ある取組の収集
報告書

2026（令和8）年3月

一般社団法人 保育教諭養成課程研究会 理事長 無藤 隆

《事務局》

〒780-0955 高知県高知市旭天神町 292-26

高知学園大学・短期大学 幼児保育学科

山下 文一 研究室

本報告書は、「文部科学省の教育課題に関する調査研究」の委託費による委託業務として
〈一般社団法人 保育教諭養成課程研究会〉が成果をまとめたものです。したがって、本報
告書の複製、転載、引用等は文部科学省の承認手続きが必要です。

問い合わせ先：文部科学省初等中等教育局幼児教育課

参考資料：「多文化を楽しむ心」を育むにつながる実践 一覧表

	テーマ	a	b	c	d	e	f	
		外国籍の幼児の入園を機に、他の国の言葉や文化への関心をもち広がる事例	地域に住む外国籍の方や卒園生が園を訪問し、その国の言葉や文化を紹介する事例	外国籍の講師が、定期的に園を訪問し、園生活を共にしながら交流する事例	外国での生活経験をもつ保護者が、言葉や文化を伝える事例	遊びにALTが加わり、外国籍の幼児の遊びの援助や他の幼児に英語での問い掛けを行うことにより、多文化理解の感覚をもてるようにする事例	その他特色ある事例	
学校法人愛泉学園 吉田保育園（栃木県）	外国籍A児の入園をきっかけにして、子供たちの世界が広がる	○		○			○	✿
社会福祉法人桜福祉会 認定こども園こどものもり（埼玉県）	日常生活に溶け込む多文化環境			○			○	
千代田区立九段幼稚園（東京都）	共に遊び生活する中で、園の一員として刺激し合うALTの存在					○		
港区立芝浦幼稚園（東京都）	遊びと生活に根ざした国際理解教育の展開			○		○		✿
港区立南山幼稚園（東京都）	幼児期から一貫した国際理解教育の推進	○				○	○	
荒川区立日暮里幼稚園（東京都）	国や地域の実態に応じた元保護者の人材活用	○	○		○		○	
学校法人安見学園 板橋富士見幼稚園（東京都）	カリキュラムと連動したICTを使った 多文化を楽しむ新たな取り組み						○	✿
江戸川区立船堀幼稚園（東京都）	我が子が卒園後も保護者が長年に渡り5歳児と交流する	○	○	○				✿
国立大学法人金沢大学 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園（石川県）	小学校と連携した外国籍の子供の支援	○			○		○	
静岡市立登呂こども園（静岡県）	国は違っても子育てに悩みをもつのは一緒	○			○		○	
名古屋市立第一幼稚園（愛知県）	外国籍の子供と日本の子供が互いの言葉に関心をもつ	○					○	
学校法人光明学園 光明幼稚園（京都府）	いろいろな国の子供をいつでも受け入れる	○			○		○	
大阪市立常盤幼稚園（大阪府）	外国籍の幼児の入園を機に、 他の国の言葉や文化への関心をもつ	○			○		○	
学校法人成城学園 認定こども園日吉幼稚園（大阪府）	毎日の幼稚園での生活の中で、 多様な人や言語、文化と出会う	○		○			○	
学校法人三笠学園 認定こども園岩国東幼稚園（山口県）	多文化の中で育まれる子供の心と学び					○		
学校法人吉田学園 認定こども園岩国川下幼稚園（山口県）	遊びや生活に入り込む英語講師						○	
学校法人四国大学 四国大学附属認定こども園（徳島県）	外国籍の大学教員との関わりから 異なる文化と出会い、広がり、深まっていく			○				✿
本山町立本山保育所（高知県）	ALTと共に過ごし違いを認め合う			○		○		
国立大学法人福岡教育大学 福岡教育大学附属幼稚園（福岡県）	保護者による活動を通して異なる文化を身近に体験する				○	○		✿

✿印の園は、「多文化を楽しむ心」を育む実践に取り組んでいる幼稚園等の研究協力園を示す